PROGRAM

10月23日(水)　於：三朝町総合文化ホール

9:00 第一部　温泉を活用した健康づくり広域連携会議
12:30 一般受付開始
13:30 健康と温泉フォーラム 2019 in 三朝町 開会式
14:15 第二部　温育プログラム
「郷土に学び、郷土を誇れる子どもを育てる教育
〜地域の魅力を再発見し、ふるさと愛を育む〜」
三朝町立三朝中学校「三朝町 PR ビデオの上映・解説」
三朝町立三朝小学校「総合学習:地域の宝を見つけよう」
15:00 休憩
15:15 記念講演「三朝温泉と健康と私」 松田 美由紀(女優・写真家)
16:15 全国温泉地宿泊券等抽選会
17:00 閉会

10月24日(木)　於：ブランナールみささ

日本遺産体験ツアー ※事前申込 各 1,500 円
(A 三徳山見学 7:30~/ B ラドン熱気浴体験 8:00~ / C 鉱泥湿布体験 9:00~)
10:30 第三部 新・湯治セミナー（環境省共催）
「温泉を活用した地域の健康づくりへの挑戦」
基調報告 環境省自然環境局温泉地保護利用推進室長 山本麻衣
パネルディスカッション
コーディネーター:坂本 誠(健康と温泉フォーラム専門委員)
パネラー:　首藤勝次(大分県竹田市長)
荒川光昭(山形県大蔵村診療所長・温泉療法医)
新藤祐一(NPO みささ温泉理事長)
12:00 閉会
送迎バス1 倉吉駅行き(鳥取空港、JR でお帰りの方)
送迎バス2 湯村温泉行き(日本の名湯百選連携会議参加者の方)

10月24日(木)　関連事業(於:兵庫県新温泉町)

15:30　第8回日本の名湯百選連携会議
18:00　交流レセプション

特定非営利活動法人 健康と温泉フォーラム

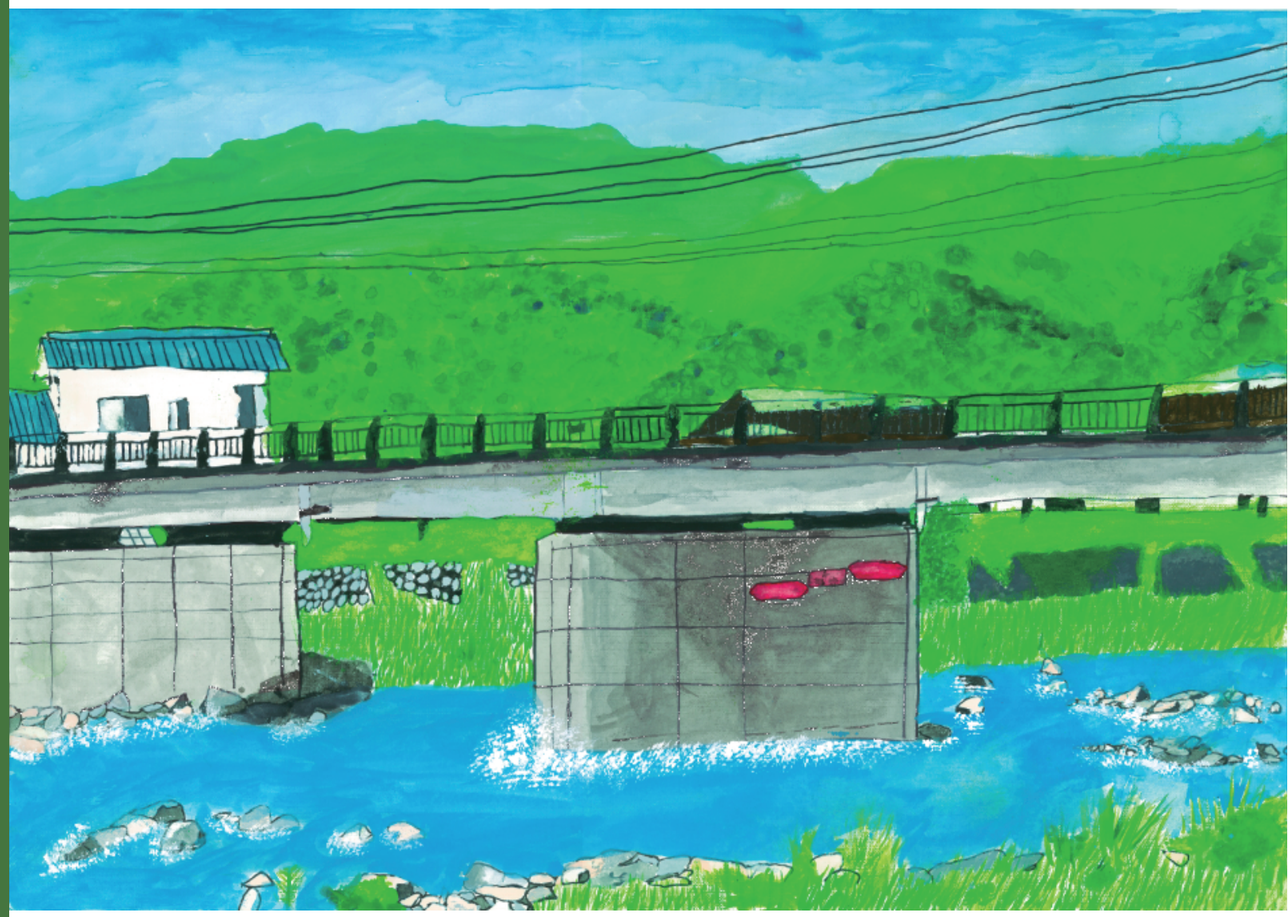
NPO 法人健康と温泉フォーラムは、医療・環境・施設等、温泉保養地に関わるあらゆる専門家によって 1986 年に設立された非営利団体です。その活動は、温泉の健康利用促進の啓蒙・普及活動はもとより、心身ともに健康で幸福な生活（Well-being) をおくるための温泉保養地づくりに必要な「環境・施設・プログラムづくり」に関する様々な国内外の情報の提供や政策提言等を通じて健康で活力ある社会の構築に貢献する事を目的として活動しています。

温泉を活用した健康づくり全国大会 2019
健康と温泉フォーラム2019 in 三朝町

The Forum on Thermalism in Japan

温泉地から始まる健康づくりー
五感と心を癒す ONSEN の未来

2019年10月23日(水)、10月24日(木)
三朝町総合文化ホール/ブランナールみささ
関連事業:新・湯治セミナー(環境省共催)
第8回日本の名湯百選連携会議
(10月24日 兵庫県新温泉町)



温泉を活用した健康づくり全国大会 2019三朝町実行委員会
特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム

CONTENTS

1.主催者挨拶　三友 紀男　(NPO法人健康と温泉フォーラム会長).....1

2.歓迎挨拶　平井伸治　(鳥取県知事)

3.後援団体挨拶　宮下 和久(一般社団法人日本温泉気候物理医学会理事長) ..2
栗原 茂夫(一般財団法人日本健康開発財団理事長)
岡田 友悟(NPO法人 日本スパ振興協会理事長)

4.記念講演「三朝温泉と健康と私」 4
松田 美由紀(女優・写真家)

5.第一部　温泉を活用した健康づくり広域連携会議 4
ファシリテーター 合田 純人(NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)
プレゼンテーター 三友 紀男 (NPO法人健康と温泉フォーラム会長)
全国温泉地首長（寄稿文含む）
松浦弘幸　(鳥取県三朝町長)
門脇 光浩 (秋田県 仙北市長)
石田 耕太郎(鳥取県 倉吉市長)
江頭 実　(熊本県 菊池市長)
首藤 勝次 (大分県 竹田市長)
河田 誠一 (北海道 豊富町長)
田中 清善 (新潟県 阿賀野市長)
太田 昇　(岡山県 真庭市長)
大西 倉雄　(山口県 長門市長)
西村 銀三 (兵庫県 新温泉町長)
宮元 陸　(石川県 加賀市長)
伊藤 康志　(宮城県大崎市長)

6 第二部 温育プログラム「郷土に学び、郷土を誇れる子どもを育てる教育 18
〜地域の魅力を再発見し、ふるさと愛を育む〜」
三朝町立三朝小学校、三朝中学校

7 第三部　新・湯治セミナー「温泉を活用した地域の健康づくりへの挑戦」..... 19

コーディネーター 坂本 誠　(NPO法人健康と温泉フォーラム専門委員)
プレゼンテーター 山本 麻衣(環境省 温泉地保護利用推進室長)
首藤 勝次 (大分県 竹田市長)
荒川 光昭(山形県大蔵村診療所所長)
新藤 祐一(NPOみささ温泉　理事長)

8.特別寄稿「温泉活用による健康増進について」 25
三友 紀男(日本温泉気候物理医学会 温泉療法医会 会長)

【後援】環境省、厚生労働省、観光庁、岡山大学、全国市長会、全国町村会、鳥取県、鳥取県中部医師会、 地域活性学会,(一財)日本健康開発財団,(一社)日本温泉気候物理医学会・温泉療法医会、NPO法人日本スパ振興協会、NPO法人ガイア・イニシアティブ　新日本海新聞社、NHK鳥取放送局、BSS山陰放送、TSK山陰中央テレビ、日本海テレビ他

三友 紀男
みとも　としお

NPO法人
健康と温泉フォーラム会長
日本温泉気候物理医学会
温泉療法医会 会長

主催者挨拶

昨年秋、月見草の咲く五頭山麓の出湯三泉、村杉温泉、今板温泉、出湯温泉での開催に続き、本年は、日本遺産の三徳山三佛寺投入堂でも有名な山陰の名湯、三朝温泉で地元実行委員会と共催して健康と温泉フォーラム2019in三朝町を開催いたします。
２０１３年に「ラジウム・ラドン温泉広域連携による地域活性化」をテーマに新潟県阿賀野市で始まり、三朝温泉（２０１４）、秋田県仙北市（２０１５）、山梨県北杜市（２０１６）、鳥取県倉吉市（２０１７）での開催が続き、昨年の阿賀野市での一巡した、このラジウム・ラドン温泉広域連携事業を、ラジウム・ラドン広域連携の温泉地だけではなく、広く健康や介護・福祉に地域の健康資源として温泉を活用していこうとする全国の温泉地に呼びかけることにより、運動は拡大し、医療費控除が受けられる温泉利用型健康増進施設の認定条件緩和や、新たな温泉に関わるナショナルブランド政策の提言など、いくつかの大きな成果を得ることができました。
東日本大震災とその後の原発事故による風評被害を払拭し同じ泉質を持つ温泉地の連携を図ったこのラジウム・ラドン温泉広域連携の役割は、昨年一応の節目を迎え、本年度はこの温泉地の広域連携を土台に、新たなネットワークで日本の温泉地のさらなる飛躍を図るため、同じ志を持つ全国の温泉地に呼びかけ、本日、多くの温泉地の参加を得て温泉を活用した健康づくり広域連携会議を開催することができました。
今年のフォーラムでは、自治体や温泉地関係者が集うこの「温泉を活用した健康づくり広域連携会議」や、地元小中学生による温泉に根差した地域文化教育の発表、そして環境省と共催で新たな時代の温泉の活用を考える新・湯治セミナーなどを開催いたします。今回のフォーラム参加の中核をなす連携温泉地は、温泉療法医が選ぶ日本の名湯百選や、環境省の認定する国民保養温泉地に認定されています。今後は、これらの温泉地が一体となって、日本の温泉文化の国際的な発信や、国が進めるナショナルブランドとして「新・湯治プロジェクト」などを見据えながら、温泉地の官民連携、温泉地同士の広域連携に加え、企業や市民を巻き込み、すべての国民が温泉の恵みを享受できる社会的な仕組みを構築した「健康温泉都市」を目指す第一歩を踏みだしたいと念じております。
皆様の今後一層のご指導・ご支援、ご協力をいただきますようお願い申し上げるとともに、最後になりましたが、今回のフォーラムを開催するに当たり、地元、三朝町や実行委員会に多大なるご支援をいただきました関係各位に深く敬意と感謝の意を表し主催者のご挨拶といたします。

平井 伸治
ひらい　しんじ
鳥取県知事

昭和36年9月17日生
昭和59年3月　東京大学法学部卒業
4月　自治省入省
平成11年7月　鳥取県総務部長
平成13年6月　同副知事
平成19年2月　総務省退職
4月　鳥取県知事選挙初当選
鳥取県知事就任
平成31年4月　鳥取県知事選挙再選
（４期目）

歓迎挨拶

「温泉を活用した健康づくり全国大会2019」の開催を心よりお祝い申し上げますとともに、全国各地からお越しいただきました皆様を心から歓迎申し上げます。
本県は、中国地方の日本海側に位置し、鳥取砂丘をはじめとする様々な地形や地質を有する山陰海岸ジオパーク、古くから霊山と崇められる中国地方最高峰の大山を有するなど、多様な自然に恵まれた県であります。
また、中国地方随一の温泉県であり、特に８５０年前、白き狼に導かれて発見されたと伝えられ、古くから湯治の湯として親しまれている当地三朝温泉と、他に類を見ない湯の美しさから「白金の湯」と呼ばれている関金温泉は、共に「ラジウム・ラドン温泉」として健康づくりへの活用が勧められてきました。
さらに、ここ三朝町には日本遺産の三徳山をはじめ、弦楽器による『製作と演奏』この二つをテーマにした三朝バイオリン美術館、国名勝に指定された小鹿渓などがあります。周辺市町には、赤瓦、白壁土蔵群に代表され、谷口ジロー先生の「遥かな町へ」の舞台となったレトロな町並みや名探偵コナンに会える町があり、境港市の水木しげるロードとともにまんが王国とっとりの魅力を発信しています。また、鳥取県は、「蟹取県」のカニや肉質日本一の鳥取和牛など、食のみやこでもあり、食の魅力にあふれた地域です。
本大会において、地域とともに生きる温泉として、温泉資源の疾病予防や健康づくりへの活用を通じた温泉地の新たな可能性などについて研究を深められ、三朝温泉をはじめ、全国の温泉地の発展への大きな一歩になることを願ってやみません。
結びに、本大会開催に多大な御尽力を賜りました関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに、御列席の皆様の御健勝、御多幸をお祈り申し上げます。どうぞ秋の装い深まりゆく鳥取県の温泉と食と人情をお楽しみください。

後援団体挨拶

宮下 和久

みやした　かずひさ

一般社団法人
日本温泉気候物理医学会理事長

昭和 53 年　和歌山県立医科大学卒業　公衆衛生学教室入局
平成 8 年　和歌山県立医科大学医学部教授（衛生学）
平成 18 年　和歌山県立医科大学医学部長
平成 22 年　和歌山県立医科大学副学長
平成 30 年　和歌山県立医科大学理事長・学長

健康と温泉フォーラム 2019 in 三朝町が、ご当地三朝町で盛大に開催されますこと、心よりお慶びを申し上げます。

ここ三朝温泉には、岡山大学医学部附属病院三朝分院の前身、岡山医科大学三朝温泉療養所が 1939 年に開設され、以来今年で 80 周年を迎える記念の年に、健康と温泉フォーラムが開かれることは、誠に意義深いことと存じます。三朝温泉は、世界的にも注目される天然ラジウム温泉でありますが、三朝分院を拠点として温泉医学に関する数々の臨床研究がなされ、われわれの日本温泉気候物理医学会の学術活動の中核として、輝かしい研究成果を世に送り出されました。日本温泉気候物理医学会としましても、放射能線の効用をはじめとして温泉の効用およびその機序、温泉入浴に関する健康増進効果等に関する研究を今後共積極的に行い、温泉と健康のエビデンスを発信して参りたいと思います。

わが国は、世界に類を見ない少子高齢化が進んでいます。中でも高齢者を取り巻く医療の問題は、単に従来からの治療医学にととどまらず、加齢に伴う心身機能の低下に対応する高齢者の健康増進から、治療、介護・福祉に至る切れ目のない医療対応が求められています。温泉地、温泉を利用した健康づくり、温泉地療養、リハビリテーション、それぞれが高齢者医療を展開するうえで重要なカギを握るポテンシャルを持っています。今こそ、関係する国、地方行政をはじめ、学会、関連団体が力を結集して、温泉を利用した国民の健康づくりに歩調をあわせて前進する時だと思います。

本 NPO 法人健康と温泉フォーラムは、医療・環境・施設等、温泉保養地に関わるあらゆる分野における専門家を中心とした団体であり、その活動は、温泉の健康利用促進の啓蒙・普及活動はもとより、心身ともに健康で幸福な生活 (Well-being) をおくるための温泉保養地づくりに必要な「環境・施設・プログラムづくり」を通じて、健康で活力ある社会の実現に貢献されております。まさに、先駆的なリーダとして活躍されてきました。環境省におきましては、チーム・新湯治の新たなプロジェクトを立ち上げ官民あげて温泉地振興、活性化をめざした取り組みが始まったところです。

本フォーラムが、多彩な企画のもと、それぞれの部門において大いに議論が交わされ、国の施策の推進役となるべく実り多い会議となりますことを心より祈念し、併せて NPO 法人健康と温泉フォーラムの益々の発展をお祈り申し上げます。

後援団体挨拶

栗原 茂夫

くりはら　しげお

一般財団法人
日本健康開発財団代表理事 理事長

「温泉を活用した健康づくり全国大会 2019　健康と温泉フォーラム 2019in 三朝町」が開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

日本の高齢化は、世界に例を見ない速度で進行しております。いよいよ本格的な超高齢化社会が実現しつつある中、これに伴う医療費の増大への適切な対応を図るため様々な医療制度改革の推進が喫緊の課題となっております。また一方で、「健康で豊かな老後を過ごしたい」といった国民の健康への関心は益々高まり、従来にも増して健康づくり・健康増進に対する社会的要請が強くなってきております。

当財団の主要業務の 1 つであり、制度開始から四半世紀を迎えた厚生労働大臣認定「温泉利用型健康増進施設」の認定申請においては、近隣の別個の温泉及び運動施設が一体運営されていれば良いよう認定規定の緩和が図られました。本制度は、同施設において医師の指示基づき治療のために一定の要件を満たして温泉療養を実施した場合、施設の利用料金及び施設までの往復交通費等が、所得税の医療費控除の対象となります。２０１７年７月に大分県竹田市と共に新制度第一期として認定を受けた北海道豊富町では、２０１８年１月から１２月までに１７０余名の利用者が税控除を受けられ、大きな成果を挙げています。昨今の健康に対する関心の拡大に伴って、健康増進施設に関する問合せや認定申請依頼は増加傾向にあり、自治体等における温泉の研究、実験等の問合せや依頼も増えております。

また、従来の温泉地での過ごし方から、温泉入浴に加え、周辺の自然等を活かしたプログラム等を楽しむことを通じて、現代人のライフスタイルに合った温泉地での過ごし方を提案する環境省「新・湯治」効果測定調査プロジェクトにおいて、２０１８年度における実施委託業務及び事務局運営業務を受託し、同プロジェクト参加温泉地への現地指導、調査結果に基づく全国的な見地からの温泉地の療養効果の解析及び次年度へ向けたプロジェクト実施方法の検討等を行って参りました。当財団の温泉医科学研究の経験から主体的に関わり、温泉地活性化に関しても積極的な対応をしております。

更に、人材育成に関しましては、厚生労働省の定めた実施要領に準拠し、昨年度末までに温泉利用指導者（累計５０８名）・温泉入浴指導員（累計５，５４７名）を養成しています。これらの方々は、「健康増進のための運動・温泉利用プログラムを適切に提供する能力」を有すると認定されていますので、国民の健康増進の牽引役としての活躍が期待されています。

人類の貴重な資源である温泉の正しい健康活用と地域の発展・活性化を推進することは、大変意義深く、大きな注目を集めています。高齢化が進む住民一人一人が、安心して生活を送れるよう、有機的なネットワークを構築し、新たな温泉の可能性を考えていけたら、こんなに素晴らしい事はないと思います。その中心的な役割を果たしていくのが、ＮＰＯ法人温泉と健康フォーラムであると確信しています。

1958 年東京生まれ。
筑波大学比較文化学類卒業。
1980 年日本交通公社（現ＪＴＢ）入社。宇都宮支店長、ＪＴＢ関東常務取締役を経て、2012 年より現職。
ＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム理事、ＮＰＯ法人日本ヘルスツーリズム振興機構理事、（一社）Medical Excellence JAPAN 理事、（株）長湯ホットタブ取締役
（公財）日本交通公社監事、（公財）日本修学旅行協会監事等を兼職
温泉利用指導者、温泉入浴指導員

後援団体挨拶

岡田 友悟

おかだ　ともあき

特定非営利活動法人
日本スパ振興協会理事長

1960年東京生まれ
化粧品関連の商社、温浴関連ビジネスに勤務、各種温浴施設・スパの立ち上げにかかわる。その後スパ振興協会の立ち上げに参加、スパの啓発活動に従事する。
現職　特定非営利活動法人
　日本スパ振興協会理事長
公益社団法人　日本サウナ・スパ協会　諮問委員
沖縄県エステティック・スパ協同組合　顧問
特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム理事
国立大学法人　琉球大学
非常勤講師

健康と温泉フォーラム 2019 in 三朝町「温泉地から始まる健康づくり－五感を癒すＯＮＳＥＮの未来」が開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

日本スパ振興協会では２００２年より日本におけるスパの啓発、スパの利用促進、スパで働く人々の教育を中心にスパの振興に努めてまいりました。

日本においてスパを語る際、温泉は最も重要な要素です。その温泉は世界中のウエルネス、スパ市場において大いに注目され、海外の温泉愛好家は日本の温泉に期待し、日本に来ています。一方、入浴に慣れ親しんでいない地域で自噴の温泉があっても利用されていなかった国々でも温泉の利用を考え、日本型温泉施設の計画が進んでいます。温泉システムの輸出がビジネスになる時代となりました。

今日本の温泉地は従来型の観光旅行だけではなく、環境省の推進する「新・湯治」を取り入れたり、経済産業省の推進するヘルスツーリズム認証制度を利用してウエルネスプレイスとして活性化を図る地域も増えてきています。日本国内の人口減少と高齢化が言われ、人生 100 年時代を前提とすれば健康寿命延伸のためには定期的に訪れて心と体をリセットするウエルネスプレイスは必須といえます。家庭と職場以外の第三の場所ウエルネスプレイスとして、温泉地の位置づけを考えることも必要でしょう。

こういった環境下の中、地域や泉質を超えて人々の健康と癒しのために温泉地が連携して、健康の維持・回復・増進の場として確立していくことが必須といえます。また、温泉のみならず日本人の入浴習慣に関しても、若い人を中心にシャワーのみで済ませ、湯船につかる習慣が薄れてきています。健康だけでなく文化的側面からも温泉関係団体だけでなく、温泉地や温泉地を有する自治体、健康関連産業、研究機関が連携して温泉文化、入浴習慣を国内外に発信していくことが重要だと考えます。

最初に書いたように温泉や入浴は海外からも注目され、海外からの訪日外国人観光客を取り込むだけでなく、海外に展開することも可能です。

この魅力ある温泉が日本人には身近すぎてその良さに気が付かなかったり、忘れられたりしています。温泉の持つ力、魅力を皆で伝えることで温泉地がウエルネスプレイスとして再活性することを期待します。

記念講演　「三朝温泉と健康と私」

松田 美由紀

まつだ　みゆき

女優・写真家

今から約10年前、三朝温泉を舞台にした映画「恋谷橋」の撮影で初めて三朝を訪れました。
三朝の温泉の女将さんの役でしたので、毎日温泉にたっぷり入ってから撮影という最高なロケでした。
その際、三朝の方々が本当に良くして下さって、皆さんのその人柄、三朝の温泉、町並み、食事に一気に惚れ込みました。
また、私事ではございますが、つい先日体調を崩したことをきっかけに、今まで以上に体の声を聞き、体に良い事をしていこうと考えております。
今回の講演では、三朝温泉の魅力、そして健康との関わり方について、私なりにお話させて頂きたいと思います。

東京都出身。1979年に映画デビュー。同年「探偵物語」(79/NTV)出演を機に、映画やテレビなどで活躍。2005年には初舞台 『ドレッサー』(05)にも挑戦、演劇にも活躍の幅を広げている。主な映画出演近作に『2つ目の窓』(14)、『ホットロード』(14)、『ラブ&ピース』 (15)、『ボクは坊さん。』(15)、『ちはやふる』シリーズ(16・16・18)などがある。
近年はシャンソン歌手としても活動を始め、11/6(水)東京・天王洲KIWAにて、初のソロライブ「今日が始まりの日」の公演が行なわれる。
http://www.office-saku.com

ファシリテーター

合田 純人

ごうだ　すみと

特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム
常任理事

超高齢社会の中、健康寿命の延伸・医療費削減など社会保障政策の基盤要請によって、全国の温泉地で温泉を健康づくりや介護・福祉に活用する温泉の社会的活用が地域の大きな関心事になってきました。近年、温泉を疾病予防や健康増進として活用した日本に古くからある湯治文化―近代医学では　補えない人間の本来持つ本質的な生命力を再生する装置として温泉とそれを取り巻く自然環境―が社会的な資本として見直されています。温泉地を持つ地域行政は観光資源としてだけでなく健康・福祉など総合的に取り組んだ温泉行政が求められていて、観光地としていままでは競合関係にあった全国の温泉地が、限られた資源である温泉を地域資源としていかに有効に活用するか、そのため自治体のみならず、温泉に関係する産官学の立体的な連携のプラットフォームが不可欠で、本会議ではその経験や政策の　情報共有のネットワーク化を図り、より広域に様々な分野で連携することにより、「温泉新時代」として住民の豊かで健康な生活を創生していくことを主旨として企画しました。昨今温泉に対する社会的環境の期待が高まりフォーラムの活動が益々注目されるようになりました。多様な価値観を尊重する社会の成熟は同時に温泉の真の価値が評価され、母なる地球の滋味あふれる贈り物として表舞台に押し出されていくようなそんな爽やかな風の気配を感じます。
温泉に浸かる行為は生命の原初に遡上する感性が再映され、人はそこに限りない安らぎと癒しを感じるのではないでしょうか！！

1949年生まれ香川県出身。1986年設立の健康と温泉フォーラム創立メンバーで、世界保健機関(WHO)と公式関係を持つ国際温泉気候連合のアジア・太平洋協議会(FAPAC)事務局長を1988年から2002年まで兼務。永年、欧州温泉国との研究交流を継続しながら、域内のベルーやイラン政府などの温泉開発やその社会化に関わり、温泉のグローバル化を積極的に進めてきた。国内では、温泉地の広域連携や温泉研究の産官学のプラットフォームづくり、温泉療養の医療費控除など政策提言、特に最近は、温泉人材の育成などに力を注いでいる。専門は健康社会学。主な著書「新湯治のすすめ」「日本の名湯百選」「温泉からの思考」「温泉実務必携」(共著)他

日本温泉気候物理医学会・温泉療法医会の活動
--温泉療法医の広域連携による温泉活性化計画―

三友 紀男

みとも　としお

NPO法人
健康と温泉フォーラム会長
日本温泉気候物理医学会
温泉療法医会 会長

1.学会の沿革
現在の一般社団法人日本温泉気候物理医学会は、85年前の1935年（昭和10）に日本温泉気候学会として発足した。現在129の分科会から構成されている日本医学会の15番目に位置する極めて伝統のある学会である。その後、年1回の学術総会を全国の温泉地にて開催し、また各種の温泉医学、療養に関する書籍を発刊してきている。

2.学会の目的
現在の定款には、目的として「温泉・気候・物理医学の学術研究ならびにその応用を推進し、加えて、会員相互の親睦と発展を図ることを目的に、次の事業を行う」と定め、具体的には
（1）学術集会の開催
（2）学会誌の編集・発行
（3）専門医の育成・教育研修の実践
（4）専門医・研修施設の認定
（5）国内外の関連学会および諸団体との交流ならびに協力助成
（6）その他本会の目的達成上必要な事業
をあげている。

3.温泉療法医会
温泉療法医会は、学会によって温泉療法医として認定された学会員を以って自動的に構成される組織であり、その目的として、「温泉療法医の知識の向上に必要な情報交換、研究、親睦および国際交流を通じ、温泉療法の発展を図り、以って、学会定款第4条に定める目的達成に寄与し、広く社会へ貢献すること」を掲げ、温泉療法及び関連科学に関する調査・研究活動、研修会、会報の編集・発行などの活動を行っている。

4.温泉療法医・温泉療法専門医の認定と更新
温泉療法医は、学会会員歴が3年以上あり、学会の認定委員会が定める療法医教育研修会の全過程を終了すると認定され、その後、5年間に定める5単位以上の研修受講で更新される。一方、温泉療法専門医は、5年以上の会員歴と2年以上の温泉療法医歴を有し、学会の定める研修指定施設で2年以上の研修を受け、別に定める基準の研究業績があるものが受験資格を有する学会の認定試験に合格することで認定される。認定後5年間に定める20単位以上の研修受講で更新されていく。
2019年4月1日現在で、学会会員数は1881名（うち医師は1,616名）であり、温泉療法医は専門医203名と合わせて997名である。

5.国民保養温泉地/温泉利用型健康増進施設指定・認定要件における医師の要件
国が国民の健康増進、医療福祉の向上のために指定・認定する温泉には、
環境大臣が指定する国民保養温泉地と厚労大臣が認定する温泉利用型健康増進施設がある。それぞれの指定・認定
基準にはそれぞれ医師要件が含まれている。国民保養温泉地指定基準では、温泉地の環境等に関する条件の一つとして、「医学的立場から適正な温泉利用や健康管理について指導が可能な医師の配置計画又は同医師との連携のもと入浴方法等の指導ができる人材の配置計画若しくは育成方針等が確立していること」があげられている。一方、温泉利用型健康増進施設の認定基準としては、「医療機関と適切な提携関係を有していること」とし、提出する書類として「医療機関との提携並びにこれに係わる業務に従事する医師の氏名、履歴及び保有する資格を記載した書類」が含まれている。
すなわち、これらの要件には、どのような経歴などを持つことが望まれるかなどの具体的には定められていない。

6.どのような医師が届けられているか
環境省のHPに記載されている国民保養温泉地79カ所、厚労省HPおよび財団法人日本健康開発財団のHPに記載されている23カ所の温泉利用型健康増進施設について、どのような医師が届けられているかを調査した。その結果は表のとおりであった。

	国民保養温泉地	温泉利用型健康増進施設
温泉地/施設　数	79カ所	23施設
学会会員	25カ所	18施設
うち、療法医	14カ所	10施設
専門医	10カ所	6施設
一般会員	1カ所	2施設
非学会員	49カ所	5施設
不明	5カ所	

すなわち、79カ所の国民保養温泉地において本学会会員が届け出されているのは25カ所（32%）であり、それら医師は1名を除いて療法医あるいは専門医であったが、49カ所（62%）の届け出医は本学会非会員医師であった。一方、温泉利用型健康増進施設23施設においては、18施設（78%）が本学会会員で、それらのうち16施設においては療法医あるいは専門医であったが、5施設（22%）では非学会員が届け出されていた。

7）課題
①医師の配置要件の見直しの要望
国民保養温泉地も温泉利用型健康増進施設も、その指定・認定には医師の配置が求められている。しかし、その医師の

要件には医師であるとともに温泉療養の指導のできる見識を有することを求めてはいるが、それ以上の要件は求めていない。今後、その医師要件に温泉療法医/専門医であることを明確に記載することを要望していきたい。これらの制度が発足した時代においては、温泉療法医/専門医の取得者数が十分ではなく、明確に記載することは困難であったと想像される。平成9年（1997年）、小暮日本温泉協会長、宮本日本温泉気候物理医学会理事長、植田日本温泉療法医会長の3者で、当時の環境庁自然保護局長宛に、国民保養温泉地の顧問医には学会認定の温泉療法医をとの要望書を提出しているが、回答を頂けずに経過している。

②届け出されている非会員医師には本会入会を働きかけていく

HPなどからの調査で、国民保養温泉地の62%、温泉利用型健康増進施設の22%の配置は温泉気候物理医学会会員ではなかった。今後、これらの配置医師には本学会に入会し、研修会等にご参加頂き、温泉療法医、専門医の資格を取得し、療法医活動に参画し、各種の知見を学び、それを基に療養者の指導により専門的に携わって欲しいものと考える。

③届け出医師の研鑽と幅広い連携の推進

現在、配置された医師の組織的連携の場はない。これらの横断的な組織化に療法医会が何らかの形で取り組みができないか模索をしていきたい。地域行政・温泉関連事業者などとの連携も持って、実践的先進的事例を学びつつ、より質の高い温泉療養指導が生まれることを目指したい。

3　終わりに

健康に対する社会的関心の高まりを受けて、この度、この三朝温泉を有する三朝町で開かれる本大会での事例発表や意見交換が、全国の温泉地の今後の取り組みに生かしていけるものと期待しています。

最後になりましたが、開催に当たり御尽力を賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム、国、鳥取県の皆様をはじめとする多くの関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、御出席の皆様の御健勝と御多幸を祈念申し上げ御挨拶といたします。

松浦 弘幸

まつうら　ひろゆき

鳥取県 三朝町長

昭和 32 年生まれ。
昭和 51 年に三朝町役場入庁、企画や観光分野を担当し、「現代湯治」を提唱。
企画観光課長などを経て、
平成 25 年に退職。
平成 26 年から民間企業で旅館経営や 6 次産業などに携わる。
平成 29 年 11 月 15 日三朝町長就任。

「温泉地から始まる健康づくりー五感と心を癒すＯＮＳＥＮの未来」をテーマに、「温泉を活用した健康づくり全国大会～健康と温泉フォーラム2019in三朝町」が、ここ鳥取県三朝町で盛大に開催されますことをお祝い申し上げますとともに、全国各地からお越しいただきました皆様に心から歓迎申し上げます。

本大会では、地域資源である温泉を観光資源としてとらえるだけではなく、温泉を広く心身の健康に生かそうとする全国の温泉地が連携することにより、更なる温泉の可能性を追求していきたいと思います。

1　三朝町と三朝温泉

三朝町は、鳥取県のほぼ中央に位置し、町総面積の約90%を山林が占める自然環境に恵まれた湯と山の町です。町の主な産業は「観光」と「農林業」で、観光業では、平成27年に日本遺産に認定された「三徳山と三朝温泉」などの観光資源を有しており、農林業においては、「三朝米」や「神倉大豆」など、本町の自然環境を生かした農産物に注目が集まっています。

およそ850年前に白い狼の導きによって発見されたと伝えられる三朝温泉は、大正5年に世界屈指のラジウム泉と認定され、以来、特徴的ともいえる泉質を生かした温泉療法に関する研究が岡山大学等を中心に進められ、三朝温泉は日本有数の湯治場として、訪れていただく皆様の心と身体を癒し続けて参りました。

三朝温泉の上流に位置し、三朝温泉が発見されるよりずっと昔の、今から1,300年以上前に役行者が修験道の行場として開いたのが始まりとされる「三徳山」は、山岳仏教の霊場として栄えてきました。険しい地形と国宝投入堂をはじめとする建築物とが織りなす独特な景観を有しており、その厳かさは今も守り続けられています。

一方、開湯以来、三徳山信仰と深いつながりを持つ「三朝温泉」は、その昔修験者が三徳山参拝の前後に心身を清め癒すための大切な拠点であったとも言われ、今でも多くの参拝客が身を清め、疲れを癒しに訪れる地でもあります。

三徳山と三朝温泉との古くからのつながりは、断崖絶壁での参拝により六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）を清め、三朝温泉での湯治で六感（観、聴、香、味、触、心）を癒すというユニークな世界観を有しています。

日本遺産に認定されたことを契機として、ここに住む皆様に町の魅力を再確認していただくとともに、国内外へ積極的に発信していくことにより、交流人口の拡大を図り、地域の活性化を目指すこととしています。

2　三朝温泉の取り組み

「三晩泊まって三回朝を迎えると元気になる」との評判からその名がついたとも言われる三朝温泉では、現在、旅館と町内の病院とが連携し、鉱泥湿布や、温泉プール運動療法などの温泉を活用した取り組みや、三朝の自然を満喫しながらゆったりとした時間を過ごしてしていただけるよう、温泉で自然治癒力を高める「現代湯治」の取り組みを進めています。

現代湯治参加旅館では、三朝温泉の入浴アドバイザー「ラヂムリエ」が温泉の効能や入浴方法を適切にご案内しています。川の流れを眺めながら入浴できる河原風呂や、町中に点在する足湯や飲泉、そして昔ながらの湯治施設など、バラエティに富んだ温泉を楽しむことが出来ます。

来春には、岡山大学旧三朝医療センター分室跡地に新しいラドン熱気浴施設もオープンし、三朝温泉の効能や泉質を象徴する大切な施設のひとつとして期待しているところです。

三朝温泉では今後も、温泉をはじめ、自然や文化等の地域資源を活用し、訪れる人が心身共にリフレッシュできるような機会を提供することができるよう努めて参ります。

門脇　光浩

かどわき　みつひろ

秋田県 仙北市長

昭和３５年 ７月２６日生
昭和５６年 ４月 西木村役場吏員
平成１５年 ５月 秋田県議会議員
平成２１年１０月 仙北市長

健康と温泉フォーラムが、今年は鳥取県三朝町において盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

１．仙北市の概要

仙北市は、秋田県屈指の観光地で、東京から秋田新幹線だと２時間台で到着します。春はミズバショウ・カタクリ・サクラなどが有名で、夏は瑠璃色の田沢湖、高山植物の美しさに花の山と呼ばれる秋田駒ヶ岳、秋は抱返り渓谷の紅葉、冬はたざわ湖スキー場を中心としたウインタースポーツと、四季それぞれに賑わいます。角館の武家屋敷に代表される伝統的建造物の数々、また玉川・乳頭・田沢湖高原・水沢の温泉郷は常に全国上位の人気を誇り、角館のお祭りや紙風船上げ、火振りかまくらなどの民俗行事も多彩です。これらを求め、年間５００万人以上のお客様が仙北市を訪ねてくれます。一方で、仙北市も人口減少に歯止めがかからない上に、高齢化率も高い現状です。

２．地方創生・近未来特区としての取り組み

このような中、積み上がった課題解決を図るため、平成２７年８月２８日付けで医療と農林業、それに近未来技術で国家戦略特区の指定をいただきました。今年２月には内閣府と仙北市による仙北市特区推進共同事務局を設置し、取り組みの加速化を図っています。

これまで、近未来技術分野では、特定実験試験局制度に関する特例を活用した「ドローンインパクトチャレンジアジアカップ」の開催や、シルバー人材センターの就業時間の延長を図り、農業分野で週40時間（現行法では20時間）の就業を可能にし、また、地域限定旅行業における旅行業務取扱者の要件規制を特区として緩和させるなど官民連携の取り組みを行ってきました。この他、民間企業が参画し事業化に向けた実証実験を行っていますが、現状では実証の枠を超えるに至っていないケースが多い状況です。

平成３０年６月には国連が定める「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に向けた取り組み行うため、「SDGs未来都市」に選定されました。持続可能なまちづくりを目指す中で、水素エネルギー社会実現に向けた整備を掲げ玉川温泉の強酸性の源泉（ph1.2）から水素を抽出する事に成功しています。これは、東北大学大学院との連携で温泉を活用したエネルギーの地産地活の一歩を歩みだしたところです。

３．終わりに

先述した、旅行業法や労働法の規制緩和について一定の進捗を迎えています。特に旅行業法の規制緩和では、温泉と医療、娯楽を中心としたヘルスケアツーリズムなど地元団体が旅行商品の造成や販売、代金回収も行えるようにするもので、温泉へ誘客力を格段に増加させることができると見込みます。

このように、規制緩和という手段を十分に生かし、市民の皆様にご理解をいただきながら、まちを元気にする事業、さまざまな追い風を活用した未来型志向の事業にも取り組み、雇用の創出、誘客対策などで地域経済を活性化し、人口減少や少子高齢化をはじめとする地域の課題解決に、負けずに取り組みたいと考えています。

結びに、温泉フォーラムの開催にご尽力をいただいた関係各位に感謝を申し上げます。フォーラム関係者間の連携がますます深まり、温泉を核とした観光振興や福祉・医療の充実など、地域振興に大きく寄与することをご祈念します。

石田 耕太郎

いしだ　こうたろう

鳥取県　倉吉市長

昭和 48年３月 大阪市立大学法学部卒業
昭和 54年 10 月 鳥取県職員
平成 12年８月 境港管理組合事務局長
平成 14年４月 福祉保健部長
平成 18年４月 生活環境部長
平成 21年４月 県営病院事業管理者
平成 22年４月 倉吉市長

「温泉地から始まる健康づくりー五感と心を癒すＯＮＳＥＮの未来」をテーマに、温泉資源の観光・健康・福祉など総合的な活用に向けて、各温泉地の政策やこれまでの実践などで培われてこられた経験などを産官学で共有し連携していくため、「温泉を活用した健康づくり大会 2019」が鳥取県三朝町で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

１．倉吉市の概要

倉吉市は、鳥取県中部に位置する人口約５万人の市です。“倉吉”の地名の由来は“暮らし良し”とも言われており、恵まれた自然環境と豊富な農産物を有し、人柄は穏やかで、長年培われた歴史・文化・芸術が今でも人々の生活に息づく山陰の中核都市です。

市内には国の重要伝統的建造物群保存地区として選定されている打吹玉川地区を中心に、江戸時代末期から昭和初期までに建てられた家屋や土蔵が多く残り、その街並みは、往時の面影を残す懐かしい佇まいをみせています。

市の南部、中国地方の名峰大山の東山麓に位置する関金温泉は、養老年間（717 年～ 724 年）に鶴が怪我を癒すために入浴しているところを行基が発見し、弘法大使が再興したと伝えられています。700 年代後半に伯耆国の国庁が倉吉市におかれたことから、湯治場として、また、山陰と山陽をつなぐ備中街道の要所にあることから宿場町として栄えてきました。お湯の見た目は無色透明で、その美しさから「白金（しろがね）の湯」とも呼ばれています。泉質は神経痛やリウマチなどによいとされる単純弱放射能泉で、湯治客や地元の方など多くの方に親しまれています。自然環境に恵まれ、泉質の療養的な効果が高いことから、国民保養温泉地（昭和 45 年）と日本の名湯百選（平成 23 年）に選ばれています。

２．関金地区の取り組み

山陰屈指の古湯である関金温泉は、平成 29 年度に開湯 1300 年を迎え、関金の原点である源泉（＝温泉）に立ち返り、皆で未来の関金像を考えていこうという思いのもと、源泉回帰「関金温泉開湯 1300 年祭」を開催しました。この中で、関金地区に脈々と受け継がれてきた温泉、歴史、伝統文化、豊かな自然などの地域資源を再認識することからはじめ、観光、健康、文化、地域などの様々な視点からこれを磨き上げ、組み合わせることで、「関金ならでは」を感じることができる体験を作り上げてきました。

特に、関金温泉を中心とする大山の東山麓に広がる地域資源の魅力を発信し、東大山山麓の地域ブランディングを目的とした「東大山古道トレッキング」は、継続的に事業実施しており、関金温泉と旧国鉄倉吉線廃線跡を結ぶトレッキングコースが、温泉と健康を意識したメニューとして定着するとともに、関金温泉街を中心としたウォーキング文化が広がっていくことを期待しています。今年度はＯＮＳＥＮガストロノミーウォーキングの実施も予定しており、打吹玉川地区で街並みや食などを楽しみながらウォーキングを行い、関金温泉に入浴していただく事業を通じて、温泉地の魅力を引き出し、多くの方に体験していただくことで、温泉地の活性化をめざしています。

３．関金温泉国民保養温泉地計画の推進

平成 24 年に国民保養温泉地の指定に係る基準が見直されたことを踏まえ、平成 30 年７月に新たな関金温泉国民保養温泉地計画の承認を受けたところです。

関金温泉国民保養温泉地計画の推進にあたり、温泉街を一望できる亀井公園の環境整備などウォーキングルートの整備、ウォーキングマップや看板の整備を行い、温泉地を訪れた誰もが自由にウォーキングを楽しめる環境づくりを実施しました。

また、地域おこし協力隊員を中心としながら関金温泉旅館組合、地域団体、観光協会、行政などが定期的に意見交換を行い、温泉と地域資源の提供を結び付けて、温泉利用による体の癒しと関金ならではの体験メニューによる心の癒しにより、関金温泉を訪れた方が心身をリフレッシュできるようなパッケージ化に向けた検討を進めているところです。

さらに、関金温泉の日帰り入浴施設「せきがね湯命館」で、周辺地域住民をターゲットにしたヨガや太極拳など健康に資するカルチャー教室の実施も計画されています。

今後も関金温泉旅館組合や地域団体とも連携を図り、自然、食、文化など地域資源を楽しみながら中期的に滞在して保養・休養できる健康増進の場として、市民と湯治客が往来する賑わいある温泉地をめざしてまいります。

４．おわりに

温泉を活用した健康づくり全国大会における事例発表や意見交換を通じて、温泉が観光分野のみならず健康分野の利活用や温泉を中心とした地域活性化など、各温泉地の取り組みに広がっていくことを期待しております。

結びになりましたが、本大会の開催にあたり、ご尽力賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラムをはじめ、開催実行委員会、関係者各位に敬意を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

江頭 実

えがしら　みのる

熊本県　菊池市長

昭和 47 年 菊池高校卒業
昭和 51 年 九州大学経済学部卒業
昭和 51 年 富士銀行（現みずほ銀行）入社
ドイツ・ニューヨーク・ロンドン・スイスなど主に海外部門に従事
スイス富士銀行社長・ロンドン支店長を歴任
平成 21 年 ソフトバンクに入社
平成 25 年 菊池市長に当選

「温泉地から始まる健康づくり～五感と心を癒すONSENの未来」をテーマに、「温泉を活用した健康づくり全国大会2019」、「健康と温泉フォーラム2019in三朝町」が鳥取県三朝町で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

菊池市は、熊本県北東部に位置する自然豊かなまちです。特に、九州有数の景勝地として知られる「菊池渓谷」は、阿蘇外輪山から湧き出す伏流水が作り出す清らかな渓流と、四季折々に様々な表情を見せる自然の景色が大変美しく、「渓谷美の極致」とも称されています。春の瑞々しい新緑、夏の木陰と清流、秋の渓流に映える紅葉、冬の雪景色など四季を移ろう風景はまさに壮観の一言です。

そして、この菊池渓谷を源に流れる菊池川は、流域の土壌を潤し、全国でも高い品質を誇る菊池米をはじめ水田ごぼう、七城メロン、旭志牛などの農林畜産物を育んでいます。

菊池温泉は、昭和29年に町なかで湧出し、平成23年10月に「日本の名湯百選」の認定を受けました。45℃の温度を保った天然の温泉は、無味・無臭・無色透明のアルカリ性で、肌に優しく柔らかい泉質は美容・神経痛・リウマチなどに効能があると言われています。別名「美肌の湯」「化粧の湯」と呼ばれるほど肌ざわりがよく、女性をはじめ多くの観光客に親しまれています。また、約10軒ある温泉宿それぞれに泉源を持つほど、湯量が豊富であることも自慢です。

菊池温泉の湧出には、温泉掘削を主導された当時の商工会長が夢の中で見た「白龍」のお告げがあったと言われています。この白龍伝説を基にした長さ50m、重さ400kgにもなる巨大な２体の白龍が毎年８月に開催される「きくち夏まつり」に登場します。白龍は地域の担ぎ手たちによりまるで生きているかのような迫力ある演舞を見せ、祭りの盛り上がりに華を添えます。

菊池市では、この菊池温泉を活用した地域振興、観光振興に取り組んでいます。
地域の方々に菊池温泉をより身近に感じ、親しんでもらいたいという願いから、地元保育園・幼稚園児や小学生を対象に、公衆浴場でのマナーや入り方、菊池温泉の湧出の歴史などを学ぶ温泉教育を進めています。

また、平成13年度より、温水プールや温泉を活用した健康づくり事業を展開し、健康づくり支援体制の整備と併せて市民グループや団体の組織を作り、市民が主体となった活動へと移行してきました。

そして、平成27年度より、保健指導機関と観光産業、行政が連携して健康づくりを支援するヘルスツーリズム事業として、医師・保健師らによるメディカルチェックや保健指導を受けていただきながら、地元食材を活用した健康的なメニューや雄大な自然を楽しむアクティビティ、温泉で過ごす癒しの時間等菊池観光の魅力も満喫いただくという「健康づくり」を軸とした観光商品の開発、磨き上げにも取り組んできました。

今後、菊池温泉の更なる魅力化に向け、行政と地域、事業者との連携を進めていきたいと考えています。

私は、菊池に何度も行きたくなる、住みたくなる『癒しの里菊池』の実現を目指しており、そのための重要なキーワードは「健康」であると考えています。今、人々は心や身体の充足＝健康を求めています。健康で豊かに過ごしたい、だから菊池に行きたいと選んでもらえるようなまちにしたいのです。ここ菊池には、先人たちが長く守り続けてきた「宝」があります。豊かな土地が育む食。悠久の時間が織り成す歴史や文化。そして、心や身体をほっと癒してくれる温泉。何物にも代えがたい菊池の「宝」であり、その全てが人々の心や身体の充足＝健康づくりに繋がります。この「宝」を求めて多くの人々が菊池に集い、交流が生まれ、さらに魅力あるまちへと発展していくことが『癒しの里菊池』の実現であると考えています。そのために、今ある一つ一つのコンテンツを更に磨き上げ、繋げ、丁寧に商品化し、発信していくことが重要であると考えています。

結びに、本フォーラムの開催にあたり、多大なご尽力を賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム、鳥取県三朝町並びに関係者各位に心からの敬意を表し、ご挨拶とさせていただきます。

首藤 勝次

しゅとう　かつじ

大分県　竹田市長

1953年生まれ
大分県竹田市出身。
1972年同志社大学入学。
1976年からの直入町役場職員時代に炭酸泉を縁としたドイツとの国際交流を推進し、姉妹都市締結を実現。
温泉療養文化館「御前湯」の初代館長を務めた後、退職。
大分県議会議員3期を経て
2009年4月より現職となり、
数々の先進的な政策を展開。
2004年国土交通省「観光カリスマ」認定
2015年温泉功労者環境大臣賞2016年マニュフェスト大賞優秀賞受賞。

「温泉地から始まる健康づくり - 五感と心を癒す ONSEN の未来 -」をテーマに鳥取県三朝町で「健康と温泉フォーラム 2019in 三朝町」が盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

１．竹田市の概要

大分県の西部に位置し、熊本県、宮崎県に隣接する本市は、岡藩七万石の歴史文化薫る城下町や、瀧廉太郎作曲「荒城の月」のモチーフとなった国指定史跡「岡城跡」、日本百名山「久住山」を主峰に峰々が連なるくじゅう連山・久住高原、その大自然によって育まれる農産物や名水名湯豊かな都市です。

その中でも国内屈指の高濃度炭酸泉として有名な「長湯温泉」は、温泉街の真ん中を流れる芹川の流域に五十一の泉源を有し、毎分およそ 4,100 リッターの国内でも珍しい炭酸泉が湧出しています

２．竹田市の取り組み

私が 2009 年（平成 21 年）に竹田市長に就任してすぐ、「個性的な温泉地づくり」の新たな戦略としてヨーロッパのように温泉療養に保健を適用させる制度を提案し、システムの実証実験を経て、同年導入致しました。これまで日本になかった先進的な施策で、原資は目的税である入湯税の一部を活用しております。

この制度は、竹田市観光ツーリズム協会及び各地域の観光案内所でパスポートの申請を行い、システムに協賛をしている宿泊施設や日帰り温泉施設で利用後スタンプを押してもらい、竹田市観光ツーリズム協会へ給付申請を行います。申請後、書類の確認作業ののち、給付金が振り込まれるという仕組みです。

制度の導入に伴い、システムを利用する滞在者が増え始め、宿泊平均では 5.2 泊（平成 30 年度）の長期滞在の実績が生まれ、滞在者の来訪時期の分散化も図られています。また、大阪観光大学観光学部の地域経済影響調査結果によると投資額に対して 20 倍、3,461 万円の波及効果があったことも報告され、消費額の向上、雇用の安定などさまざまな効果を生み出しております。

このような取り組みが評価され、2016 年（平成 28 年）２月には、日本ヘルスツーリズム振興機構主催の「第８回ヘルスツーリズム大賞」を受賞致しました。

また、世界に冠たる「温泉資源」を活用した「予防医療・健康づくり」と新たな観光振興をテーマに、地方創生交付金事業に取り組み、慶応義塾大学との連携による「飲泉の医科学的なエビデンス調査」や本市独自の「竹田市総合インストラクターの育成」といった取り組みも進めて参りました。

このような人材を活かして、2017 年 7 月 27 日には、長湯温泉療養文化館「御前湯」とＢ＆Ｇ直入海洋センター体育館が、温泉力協力協定を締結している北海道豊富町の施設とともに「温泉利用型健康増進施設（連携型）」として平成 29 年度（第１期）の認定を厚生労働大臣より受けました。これは一体型を含め、九州では唯一の認定施設であります。

また、昨年度より申請が開始されました「ヘルスツーリズム認証」制度の第 1 期として、本市観光ツーリズム協会の健康増進プログラムが 2018 年 10 月 2 日に認証されました。

このような取り組みの集大成として、おそらく日本では唯一天然かけ流しの高濃度炭酸泉による運動浴槽・歩行浴を有するクアハウスを中核施設とする温泉療養複合施設「クアパーク長湯」が本年 6 月 2 日にグランドオープンしました。育成してきた人材、蓄積してきたエビデンスを掛け合わせ、予防医療と健康増進、中長期滞在による新たな観光振興をテーマに世界に通用する個性的な温泉地づくりを更に加速させる覚悟であります。

現在、我が国は、急速な少子高齢化による社会保障費や医療費の増大といった課題に直面しています。これらの解決に向け、世界有数の温泉大国日本に存在する 3,100 ヵ所の温泉地が連携し、新たな潮流を作ることが必要であり、これこそが私たち温泉地の使命であります。

本フォーラムにおいて、闊達な議論を重ね、先導的な施策や英知の交流を図り、温泉資源の更なる有効活用に拍車がかかるよう期待しております。

結びに、開催にあたり、多大なご尽力を賜りました NPO 法人健康と温泉フォーラム、鳥取県三朝町をはじめ多くの関係各位のご努力に深く敬意を申し上げ、ごあいさつとさせて頂きます。

河田 誠一

かわた　せいいち

北海道　豊富町長

昭和３３年　北海道豊富町生まれ
昭和５６年　民間企業就職
平成６年　豊富町役場入り
平成１９年　豊富町議会議員就任
平成２３年　豊富町議会議長就任
令和元年より現職となる。

「温泉地から始まる健康づくり―五感と心を癒すONSENの未来」をテーマに、「健康と温泉フォーラム２０１９in三朝町」が、盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

1.豊富町の取り組み

豊富町は、北海道最北端の稚内市より南に約４０ｋｍ南下した場所に位置し、泉質に含まれている石油成分が特徴の温泉です。古くは火傷に効能がある名湯とされており、近年においてはアトピー性皮膚炎や尋常性乾癬などの皮膚疾患に効能があるとされ、多くの方が当温泉地を訪れております。

そのような特異な泉質から、町では温泉を利用した様々な取り組みを実施しており、町営入浴施設に専用の浴槽を設置、健康相談員（保健師・看護師）の設置、低価格の宿泊施設を開設、湯治療養をしながら通学する小中高生のためにアトピー留学制度の開始など施策を展開しております。

中でも平成２９年７月に温泉利用型健康増進施設（連携型）の認定を受けたことにより、課題であった当町までの交通費や施設利用料が、医療費控除の対象として認められることとなり、制度運用よりちょうど２年が経過する本年７月末時点において３５８件と多くのご利用をいただきました。以前より当温泉に訪れてくださっていた方によるご利用はもちろん、当温泉にご理解のある医師のご紹介により新たに豊富温泉を訪れる方も多く、認定による手応えを感じております。

2.ヘルスツーリズムの推進

このような取り組みが評価され、平成３０年には「第１０回日本ヘルスツーリズム大賞（団体部門）」を受賞いたしました。
豊富温泉では、温泉周辺を散策できるフットパスコースが設置されており、有資格者（健康運動指導士）によるスポーツイベントの開催など、療養しながら健康増進を目指す仕組みづくりを目指しております。

また、本年６月には、例年実施されておりますアトピーフォーラムin豊富が開催されました。本フォーラムは同実行委員会と当町の共催であり、本年においては講師として日本健康開発財団温泉医科学研究所長 早坂信哉先生をお招きし、「みんなが健康になれる入浴法」と題した講演をしていただきました。講演の中で、温泉には様々な効能がある旨ご説明いただきましたが、豊富温泉では湯治療養において「心の湯治」という要素を大事にしております。乾癬やアトピーの治療は身体だけではなく精神面においても大変疲弊するものであります。湯治療養者からは「同じ悩みを抱えた人に会えてよかった」という言葉を伺いますが、心と身体の両方において癒しの力があることが豊富温泉の誇る最大の特色であると思っております。

3.終わりに

近年豊富温泉は多くの関係者の方たちのお力添えによって、少しずつ全国の皆様に知っていただけるようになりました。増加する湯治客に対し温泉の抱える課題は未だ多く、繁忙期における浴槽の狭隘化対策、二次交通の整理、移住希望者の住居や雇用の確保等、様々な課題に葛藤する毎日でございますが、奇跡の湯である豊富温泉が、全国のアトピーや尋常性乾癬でご苦労されている多くの皆様方の財産としてご利用いただくことを祈りながら日々精進を続けて参りたいと思います。

最後になりましたが、本サミット開催にあたり多大なご尽力を賜りましたNPO健康と温泉フォーラム様を始め、三朝町関係者各位に感謝を申し上げるとともに、今後の発展を祈念しましてご挨拶とさせていただきます。

田中 清善

たなか　きよよし

新潟県　阿賀野市長

昭和 55 年３月　早稲田大学理工学部卒業
昭和 55 年４月　新潟県庁入庁
平成 23 年３月　新潟県庁退職
平成 24 年４月 25 日　阿賀野市長

「温泉地から始まる健康づくりー五感と心を癒す ONSEN の未来」をテーマに、「健康と温泉フォーラム２０１９ in 三朝町」が、鳥取県三朝町で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。
また、昨年１０月に当市において開催させていただきました際には、遠路多くの皆さまにお越しいただき、ご参加とご協力をいただきましたことに改めてお礼申し上げます。

１．阿賀野市の概要

本市は、新潟県の北東部、新潟平野のほぼ中央に位置し、県都新潟市に隣接しています。市の西側を流れる大河「阿賀野川」、東に標高千メートルほどの県立自然公園「五頭連峰」を背に、田園風景と自然豊かな景観が広がっています。

五頭連峰は弘法大師が開山したと伝えられ、信仰の山であるとともに、多様な登山ルートがあり、毎年多くの登山者で賑わっています。また、山麓一帯は全国森林浴の森百選に指定され、自然散策や沢登り、ハイキング、キャンプなどのアウトドア施設も整備されています。

また、本市には日本で初めて白鳥の餌付けに成功した「瓢湖」があります。
瓢湖は、全国有数の白鳥の湖として知られ、ラムサール条約の登録湿地に指定されています。毎年１０月になると５千羽余りの白鳥が飛来し、３月中旬まで市内の至る所で、日常の風景として間近に白鳥を見ることができます。

新潟県政発祥の地

江戸時代には、幕府直轄の天領として代官所が、明治 2 年には越後府として水原県が置かれ、越後における政治・経済・行政の中心となったことから新潟県政発祥の地と言われています。

新潟県酪農発祥の地

明治時代末期に旗野美乃里（安田地区出身）が欧米視察した際、乳牛３頭を持ち帰り飼育し、乳製品の製造を行ったことが、新潟県における酪農業の始まりと言われています。新鮮な生乳から製造されるヤスダヨーグルトは全国ブランドになっています。

新潟県最古の温泉地

五頭連峰の麓にある五頭温泉郷は、開湯 1200 年を誇る新潟県最古の温泉地です。静かな佇まいをみせる、出湯、今板、村杉の 3 つの温泉地では、「飲んでよし」「吸ってよし」「浸かってよし」の天然ラジウム温泉を楽しんでいただいています。

２．五頭温泉郷活性化の取り組み

五頭温泉郷は、２０１６年に国民保養温泉地の指定を受け、大地の恵みである温泉と自然・健康・食をキーワードに地域資源の活用に取り組んでいます。

＜WALK & EAT in GOZU＞

国民保養温泉地の指定を受けてから、温泉街や周辺の自然の散策と地元グルメ（地産地消の食材）、温泉を組み合わせた体験型ウォーキングイベント「WALK& EAT in GOZU」を開催しています。これは、五頭温泉郷と五頭山麓の魅力の発信と、五感と心を癒す健康づくりを目的に、温泉の若旦那と若女将が企画したもので、地元の人しか知らない秘密の散歩道や温泉地、名所などを巡り、地元の食材による食のおもてなしと交流を楽しむイベントです。
このイベントが高まりを見せていることから、今後は着地型・滞在型観光に向けた体制づくりが必要であると考えています。

３．郷土愛を育む子どもたち

昨年のフォーラムで地元笹岡小学校の４年生が、総合学習で学んだ五頭温泉郷の歴史や温泉への思いは大変素晴らしいものでした。今年も引き続き五頭温泉郷について学習しています。

また、毎年実施している全校五頭山登山の後には、温泉に浸かり疲れを癒すことにより、子どもたちは温泉が地域の宝物として実感しています。
大人になっても記憶に残るようなこれらの取り組みは、郷土のよさを再認識するだけでなく、郷土愛を育む人づくりにつながっています。

４．終わりに

健康志向の社会的関心の高まりを受け、温泉地が持つ特有の自然環境は大きな役割を果たせるものと考えております。また、時代の流れと共に温泉地の観光も団体から個人へ、また体験型へと変化しており、本フォーラムがこれらのニーズを的確に捉えて、温泉を活用した健康づくりやひとづくり、まちづくりにつながるものと期待しております。
結びに、本フォーラムの開催にあたり、多大なご尽力を賜りました NPO 法人健康と温泉フォーラム、三朝町並びに関係各位に心からの敬意を表しまして、挨拶といたします。

太田　昇

おおた　のぼる

岡山県 真庭市長

1951 年真庭市生まれ。京都大学法学部卒業。
1975 年に京都府へ入庁し、
2010 年から副知事を務めた後、
2013 年４月に真庭市長へ就任し、現在２期目。
真庭市の持続的発展のためには、地域資源を見出し、活用し、連携していくことが一つの方策であるという考えのもと、里山真庭の多彩な地域資源を生かした戦略的取組に挑戦している。

「温泉地から始まる健康づくりー五感と心を癒やすＯＮＳＥＮの未来」をテーマに世界一と言われるラジウム温泉が噴出する鳥取県三朝町で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

１．真庭市の概要

本市は、岡山県の北部に位置し本フォーラムの開催地三朝町に隣接しています。平成 17 年３月に９カ町村が合併し「真庭市」が誕生しました。面積は 828 ㎢、南北に 50km、東西 30km と岡山県下で最大面積を有しています。市北部には岡山県でも有数の観光地であり広大な草原の景観が美しい「蒜山高原」を擁し、鳥取県の名峰「大山」と一体となり国立公園に指定されています。この蒜山高原の南に５つの温泉場が広がる「湯原温泉郷」、城下町の風情が残る「勝山町並み保存地区」が続き、そのほかホタル・桜の名所など見どころが多く自然豊かな地域です。真庭市は、古くから林業が盛んで、木材の集散地として発展してきた。現在でも市内に原木市場が３市場、製材所が約 30 社、製品市場が 1 市場あり、約 20 万㎥の国産材を製材し、約 12 万㎥の製品を供給し、工業出荷額でも市全体の 4 分の 1 の額を占めるに至っています。

最近では、鉄骨・鉄筋コンクリートに替わる新たな建築構造材として注目されているＣＬＴ（直交集成材）の生産でも全国トップクラスです。東京オリンピックに合わせ、三菱地所、隈研吾建築都市設計事務所と真庭市で東京、晴海地区にこのＣＬＴを用いてパビリオン棟、展示棟など３棟を建築する計画で広くＣＬＴの普及を図るものです。また、真庭市は持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の達成に向けた取り組みを行う全国 29 都市の「ＳＤＧｓ未来都市」に選定され、人、もの、環境など広範な課題について統合的に取り組んでいます。

２．湯原温泉郷

湯原温泉郷は、旭川の渓流に沿った南北に細長い温泉地であり、上流から湯原温泉・下湯原温泉・郷緑温泉・足温泉・真賀温泉の 5 つの温泉地から成っています。下湯原温泉以外の各温泉地は、古くから湯治場として人々に親しまれており、昭和 31 年に国民保養温泉地に指定されました。また、いずれの温泉もアルカリ性単純温泉となっております。郷緑温泉以外には日帰り温泉施設が整備され、特に下湯原温泉では露天風呂と全国的にも珍しいペット専用風呂が多くの愛犬家に利用いただいています。

３．温泉と健康の取り組みについて

健康増進への温泉活用のため、平成 16 年度より湯原温泉郷の旅館・ホテル宿泊と市営湯原温泉病院の人間ドックを組み合わせた健康増進旅行プラン「湯けむりドック」を実施しています。旅行を兼ねて受診していただくため、ドック開始時間は午後から 2 時間程度で終了。また、１日数名限定の完全予約制なので、ゆったり検査を受けることができます。検診項目は基本項目を少なくし受診される方のニーズにあったオプションを用意し、受診しやすくリーズナブルな料金設定となっています。利用者の大半は 50 ～ 60 代の方で、お子様からご両親へのプレゼントとして受診される方もいらっしゃいます。

同プラン開始以来、延べ 1500 名以上にご利用いただき、リピーターも多数です。

また、当病院には 20m×8mの温泉プールがあります。ここでは、温泉療法医の資格を持つ内科医師がリハビリの方を対象に温泉療養指導を行い、また健康運動指導士の指導のもと４５分程度の水中運動を行っています。その他に一般の方の健康維持・増進のための水中運動プログラムも行っています。また、市民でつくる健康増進団体と水中運動教室を共催し、冬季の運動不足解消にも寄与しています。

４．終わりに

温泉は日々の疲れを癒し、人々の交流の場となり心と体の健康を保つ素晴らしい地域資源と言えます。本フォーラムにおける闊達なご意見が、温泉を従来の観光資源としての価値をさらに高め、健康増進の資源としてさらなる魅力アップにつながることを大いに期待いたします。

結びに、本フォーラムの開催に多大なるご尽力賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム、鳥取県三朝町、関係各位の皆様に敬意を申し上げ、ご挨拶といたします。

大西 倉雄

おおにし　くらお

山口県　長門市長

昭和 47 年 3 月　日本大学　卒業
昭和 58 年 4 月　日置町議会議員（3期）
平成 11 年 4 月　山口県議会議員（4期）
平成 23 年 11 月　長門市長（2期目）
平成 29 年 7 月　国民保養温泉地協議会会長

「温泉地から始まる健康づくり - 五感と心を癒す ONSEN の未来」をテーマに鳥取県三朝町で「健康と温泉フォーラム 2019in 三朝町」が盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

1. 山口県長門市は

長門市は、山口県の北西部に位置し、北側には、青海島や元乃隅神社に代表される日本海の絶景が広がっています。また、維新の礎を築いた「村田清風」や、童謡詩人「金子みすゞ」、画家「香月泰男」など、歴史や文化において多大な功績を残した先人を輩出しています。さらに、市内には、清流にホタル舞い、カジカの声が響く「長門湯本温泉」や、山間の湯治場「俵山温泉」をはじめ、風情や効能の異なる 5 つの温泉が湧出しており、多くの観光客が訪れています。

2. ONSEN・ガストロノミーウォーキングの取組

さて、温泉地を訪れるお客様が個人にシフトし、遊興から癒しへとニーズが変化していく中で、今温泉地に求められるテーマは、多様化するライフスタイルへの対応であり、温泉地自体に魅力がなければ集客できない時代だと認識をしています。国民保養温泉地でもある俵山温泉において、2017 年から、ONSEN・ガストロノミーウォーキングを 4 回開催いたしました。2017 年 7 月に開催した第 1 回大会では、地域おこし協力隊の若者が中心となってコース、メニューを設定し、農家の軒先でとれたての野菜を頂いたり、海の幸や山の幸を炭火で堪能するなど、ひなびた温泉地ならではの味わいを出してくれました。

このイベントは、自然景観や温泉街をウォーキングしながら、その土地ならではの食や地酒を楽しみ、地域の方々と触れ合いながら、ゆっくりと時間を過ごす。そして、メインである温泉に浸かって癒されるという新しい温泉旅のスタイルであるうえに、宿泊や販売に結び付き、地域活性化にも寄与するものだと捉えています。「めぐる」「たべる」「つかる」をテーマとしたこのイベント。Onsen・ガストロノミー推進機構のご尽力により、今年度は全国 30 か所以上の温泉地で開催されることとなっています。

3. スポーツと温泉の融合

ホットな話題として、ラグビーワールドカップの熱戦が全国各地で繰り広げられています。俵山温泉近郊の俵山スパスタジアムでは、カナダナショナルチームが 11 日間にわたって事前キャンプを実施し、トップアスリートたちが温泉も活用してコンディションを整えました。市民との交流として浴衣で温泉街を歩いたり、学校の運動会で綱引きに参加してくれるなど、地域の資源を満喫してくれました。これらの事例は、スポーツと温泉の融合、また、健康と観光を結び付け、インバウンドの拡大を図る上で大きな推進力を生んでくれました。

4. 公民連携による魅力ある温泉地づくり

また、長門湯本温泉では、観光まちづくり計画を策定し、計画に基づいた公民連携による地域活性化に取組んでいます。魅力的な温泉街を実現するための要素として、①外湯、②回遊性、③食べ歩き、④絵になる場所、⑤文化体験、⑥佇む空間、の 6 項目を掲げ、館内囲い込みスタイルからの脱却を図り、景観や温泉街を歩いて楽しむことで地域経済の活性化を促し、散策や体験で日中の過ごし方が広がることで長期滞在に結び付けようとしております。ハード整備は今年度で完了し、全国温泉地ランキングトップ 10 に入る魅力ある温泉地づくりに向けて公民一体となったスタートをまさに切ろうとしているのです。

5. 地域活性化に向けた温泉の活用

市民が心豊かに生き生きと暮らしていくためには、単に長寿であるだけでなく、健康で生きがいをもって自立した生活を送ることが重要です。そのために、温泉のもつ特性を活用しない手はありません。無類の温泉好きといわれる日本人は、古くから湯治と称して、温泉に入りながら健康を取り戻そうとしてきました。癒しの特性とともに、新しい温泉地としてのスタイルを確立することにより、地域活性化に結び付けていかなくてはならないと考えています。

6. 終わりに

終わりに本フォーラム開催にあたりご尽力いただいた関係各位に感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

西村 銀三

にしむら　ぎんぞう

兵庫県 新温泉町長

昭和 43 年　兵庫県立浜坂高等学校 卒業
昭和 45 年　大阪工業大学電子工学部 中退
昭和 45 年　会社員
平成 5 年　湯財産区議会議員（2期）
平成 10 年　旧温泉町議会議員（2期）
平成 16 年　株式会社代表取締役に就任
平成 17 年　新温泉町議会議員（3期）
平成 29 年 11 月 13 日から現職（1期目）

「温泉地から始まる健康づくり – 五感と心を癒す ONSEN の未来」をテーマに、「健康と温泉フォーラム 2019　in 三朝町」が盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

1． 新温泉町の概要

新温泉町は兵庫県の北西端に位置する町で、北は日本海に面し、南には標高 1,000m を超える中国山地の山々が連なります。

山陰海岸国立公園に指定された風光明媚な海岸は、海水浴やマリンスポーツなど多くのお客様でにぎわいます。日本海形成に関わる火成岩類や地層、日本海の海面変動や地殻変動によって形成された多彩な海岸地形など、貴重な地形・地質遺産を数多く観察できるこのエリアは、平成 22 年に世界ジオパークに認定されています。

港町「諸寄」は、古くは北前船の寄港地として栄え、寺社や廻船問屋跡など、路地を巡れば今でもその面影が偲ばれます。また、厳しい冬の季節風を乗り越えられた感謝を胸に舞い続けられる「麒麟獅子舞」は、地域に伝わる独特の獅子舞です。

山間部の耕地では、古くから牛が活躍してきました。家族同様に一つ屋根の下で暮らしながら農耕を支えてきた、穏やかで粘り強い気質の牛は、現在「但馬牛」として和牛の血統を席巻し、和牛の 95%以上がこの血を引くといわれています。

新温泉町は、これらの日本遺産（北前船・麒麟獅子舞）、日本農業遺産（美方郡産但馬牛）がその名に示す通り、山海の恵みと厳しい自然の中、日本の地質・生活・産業の歴史が息づく町です。現在も、底引き網漁を中心とした漁業、但馬牛の畜産業、そして大地の恵みである温泉を活用した観光業が町を支えます。

2． 湯村温泉・七釜温泉・浜坂温泉

町南部に位置する「湯村温泉」は、約 1,200 年前に円仁が開いたとされる歴史ある温泉です。源泉「荒湯」には 98 度の炭酸水素塩泉が毎分 470L 湧き出し、熱源として生活を支えてきました。現在では足湯を整備し癒しの空間として親しまれています。全体での湯量は毎分 2300L にもなり、温泉施設等でサウナや冷暖房の熱源として使用されるほか、事業所や民家 400 軒に給湯されています。まさに温泉の恵みにより町が成り立ってきました。

七釜温泉は、町中部の田園地帯に湧出した硫酸塩泉で、泉質には定評があり、多くのファンが町外から通います。「こたついらずの温泉」として親しまれています。また海岸近くの浜坂温泉は塩化物泉で、豊富な湯量を活かして近隣の 800 戸に配湯されています。日本海有数の底引き網漁業の基地である浜坂港には、松葉ガニ、ホタルイカなど、多くの海産物が水揚げされます。旅館や民宿では、これらの海産物の提供を通じてお客様をおもてなししてきました。両温泉では平成 19 年には「かにソムリエ」を制度化、そのこだわりは目利きや調理にとどまらず、漁場や地域の歴史にまで及びます。

3．「おんせん天国」の実現へ向けて

まちづくりのテーマは「おんせん天国」の実現です。

目標は 2 つ、1 つは豊富な温泉資源を活用して町民の健康増進を進め、健康寿命を県下一に延ばすこと。もう 1 つは観光入込客数の 5 割増です。

温泉は、水中ウォーキングに活用したり、外湯を着替えや入浴などランニングの基地にしたり、グラウンドゴルフなどのレクリエーションと併せて活用するなど、人を活動的にし、また社交場として交流を生み出します。高齢者の引きこもりを防止し健康寿命を延ばすため、まず住民が主体となって温泉の活用度を高めていきます。

観光振興については、温泉とともにある生活、「おんせん天国」生活を前面に押し出し取り組んでいきます。湯村温泉は、紙漉きに、調理に、洗濯にと古来から様々な用途に使われてきました。温泉たまご作り、湯たんぽ利用など現在にも息づく「おんせん天国」生活に、ワーケーションなど新しい形の湯治を通じて皆様に触れていただく機会を創出するとともに、地域文化に根差した温泉街の景観の復活を進めていきます。また発電や地熱の健康利用、食品加工への応用など、新たな利用にも積極的に取り組みます。

4． 終わりに

健康増進ニーズへの対応、持続可能な社会の実現に向け、温泉の潜在力がさらに発揮されるべき時代です。

本フォーラムにおいて、温泉活用に関する様々な取り組みについて検討され、また温泉地の活性化がすすめられることで、全国の温泉地が日本の社会課題の解決に寄与できるものと考えます。

結びに、フォーラムの開催に多大なご尽力を賜りました NPO 法人健康と温泉フォーラム、鳥取県三朝町をはじめ多くの関係者の皆様に感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

宮元 陸

みやもと　りく

石川県 加賀市長

昭和 56 年　3 月　法政大学法学部卒業
昭和 56 年　4 月　衆議院議員森喜朗秘書
平成 11 年　4 月　石川県議会議員
平成 20 年　4 月　石川県監査委員
平成 22 年 11 月　石川県議会 副議長
平成 25 年 10 月加賀市長（1 期）
平成 29 年 10 月加賀市長（2 期）

温泉地から始まる健康づくり―五感と心を癒すＯＮＳＥＮの未来」をテーマに、「健康と温泉フォーラム 2019 in 三朝町」が、三朝町にて開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。

1．加賀市の概要

加賀市は石川県の南西端に位置し、16.5 ㎞に及ぶ美しい海岸線は越前加賀海岸国定公園に指定されています。また、加賀市、小松市、福井県勝山市の境界にある大日山（標高 1,368 m）に源を発する大聖寺川・動橋川が日本海に注ぎ、それぞれの流域に開けた自然に恵まれた地域です。市内には四季のかおりが感じられるスポットが点在しており、年間を通して多くの観光客が訪れています。

春には大日山からの雪解け水が２つの川に流れ込み、中央公園、熊坂川、臨峰苑など市内の桜の名所で美しい桜が咲き誇ります。

北部の海岸線と南部に連なる山々は、それぞれ越前加賀海岸国定公園、山中・大日山県立自然公園に指定されており、美しい自然に触れ合える癒しの空間が形成されています。山では県民の森でキャンプやハイキング、海では「片野」「橋立」「黒崎」で海水浴を楽しむことができます。

大日山から日本海へと続く、大聖寺川・動橋川流域には鶴仙渓や柴山潟、加佐の岬など美しく豊かな自然があります。鶴仙渓にはこおろぎ橋、あやとりはし、黒谷橋という三つの橋が架かっており、季節ごとに違った表情を見せます。秋には周辺は燃えるような紅葉が橋を彩ります。

冬には山代、山中、片山津といった加賀温泉郷に冬の味覚や風情を楽しむ浴客が訪れ、美しい雪景色を堪能しています。また、ラムサール条約湿地の片野鴨池にはマガンやヒシクイ、トモエガモなどたくさんの渡り鳥が訪れ、鴨池観察館でその生態を観察することができます。

2．地域資源の磨き上げ

北陸新幹線金沢開業を契機とした首都圏への誘客施策とインバウンド観光の推進を中心とした戦略を進めるべく、第 1 次観光戦略プランを策定し、事業を展開してきたことにより、温泉地における観光入り込み客数は 2014 年の約 179 万人から 2015 年には約 200 万人にまで増加しました。

しかしながら、その後は、北陸新幹線効果が落ち着きを見せ始め、温泉地の入り込み客数は、微減傾向が続いております。

日本においては人口減少が著しく、全国的に国内旅行の需要が年々減少する中で観光地域間の競争も激しさを増し、国内誘客の難易度は年々高くなっていく一方で、海外からの観光客は増加傾向が続いており、本市においても年々増加している状況にあります。

本市は、全国屈指の山代温泉･山中温泉･片山津温泉を有し、2017 年 4 月に日本遺産に認定された北前船の歴史ストーリーが根付き、これに加え、大聖寺十万石の歴史や伝統文化、九谷焼や山中漆器に代表される伝統工芸、大日山系の山々や国定公園加賀海岸の美しい自然、豊かな土壌に育まれた美味しい食など、優れた資源が豊富にあります。

これらの加賀市特有の魅力的な地域資源を更に磨き上げながら、観光客へ提供できる新たな観光メニューの企画開発を進め、受入環境整備や情報発信強化に向けた施策を戦略的に展開することで、誘客促進を図っております。

3．加賀市の取り組み

本年度、加賀温泉郷の市内三温泉地が連携し、「『温泉』を活用した滞在・療養プログラム化とツアー造成販売事業」を計画しており、加賀温泉郷を健康づくりや生きがいづくりを提案していく拠点温泉地として、三温泉の特徴（強み）を活かした滞在療養プログラムの確立を図るための、模擬ツアー実施等を企画しております。

滞在・療養プログラム化を行うことで週末型観光からの脱却を実現し、隠れた観光素材の発掘・連携、地域の魅力度・集客力向上を進め、三温泉地の魅力アップを図ることができると期待いたしております。

4．終わりに

市民の健康づくりには、安心安全な食、適度の運動、そして温泉は欠くことができないものと考えております。

古くから湯治に活用されてきた温泉は、地域住民の健康増進やコミュニティの形成に寄与してきましたが、新たな温泉の活用により市民の健康づくりはもとより観光振興にも発展するものと考えております。

この度、療養温泉で知られる「三朝温泉」を有する三朝町で開催される本フォーラムにおいて、地域で活かす温泉として様々な取り組みを検討され、市民の健康づくり、ひとづくり、まちづくりに繋がるものとなることを期待しております。

結びに、フォーラムの開催に多大の尽力を賜りました NPO 法人健康と温泉フォーラム、鳥取県三朝町ならびに関係各位のご努力に感謝申し上げ、ご挨拶と致します。

伊藤 康志

いとう　やすし

宮城県 大崎市長

昭和２４年９月２９日生まれ
宮城県議会議員５期
県議会第３３代議長歴任後
大崎市初代市長として現在（４期目）に至る
全国市長会相談役
宮城県市長会会長
東北国道協議会会長
宮城県土地改良事業団体連合会会長

大崎市は，宮城県の北西部に位置し，東西に約８０ km の県内でも有数の穀倉地帯となっております。

２０１７年には，東北・北海道エリアで唯一，世界農業遺産（GIAHS：ジアス）として，FAO（国連食糧農業機関）より，「持続可能な水田農業を支える『大崎耕土』の伝統的水管理システム」として認定を受けております。

また，古くから宮城県の秋保温泉，福島県の飯坂温泉とともに，本市の鳴子温泉が奥州三名湯として多くの人から親しまれてまいりました。

その起源としては，西暦８２６年に鳥屋ヶ森山（現在の生物が生息する日本一の強酸性湖“潟沼”）の噴火で，現在の鳴子温泉神社より温泉が湧出し始めたのが鳴子温泉の始まりとされ，この時の大爆発の音があまりにも轟音で，付近の人々が「鳴郷の湯」と名付けたという説と，義経伝説として，兄である源頼朝に追われて奥州藤原氏の本拠地である岩手県平泉を目指していた源義経が逃げのびる途中で鳴子を訪れ，そこで北の方との間に生まれた子供に産湯を使わせたことから「啼き子」と呼ばれ，それが転じて「鳴子」となったという説もあります。

江戸時代には俳人である松尾芭蕉が東北を旅している間に鳴子を通ったとされており，永きにわたって温泉地として知られてきたということがわかります。

鳴子温泉郷は，約３７０本の源泉を有し，掲示用泉質名の１０種類のうち，二酸化炭素泉と放射能泉，含よう素泉以外の７種類が存在し，本州有数の泉質を誇る温泉地となっております。

当温泉郷は，「鬼首温泉」「中山平温泉」「鳴子温泉」「東鳴子温泉」「川渡温泉」から構成されており，多種多様な温泉地としての効能と風情を有しており，古くは湯治場として栄え，大正時代に鉄道が開通され交通が整備されてくると更に湯治客も増加し，戦後には時代背景と共にレジャーとしての利用も増加し，地域なりの特色をもった発展を成し遂げてまいりました。

現在は，旅行形態の変化から，一時主流であった団体旅行から個人旅行へと変化し，鳴子温泉郷全体として「癒し」を目的とした個人客の比率が年々増加の傾向にあります。

また，鬼首温泉，中山平温泉，川渡温泉は，温泉と自然環境の良さから，「奥鳴子・川渡温泉」として１９６０年に環境省から国民保養温泉地として指定されており，２０１６年には鳴子温泉郷全体が国民保養温泉地として，宮城県で唯一指定を受けております。

地域内での取り組みとしては，現代版湯治や温泉療養プランの推奨を行うために，温泉入浴指導員や，温泉ソムリエ等の資格取得者の拡大を図るとともに，自然環境を活用したノルディックウォーキングの推奨や，宮城県内陸部第一号となる宮城オルレ（韓国済州島発祥のトレッキング）コースの整備，温泉療法医による「温泉療養相談会」の実施や，滞在型の温泉地としての魅力創出のために，地方創生交付金を活用して，健康増進のための新たなスポーツ体験メニューの造成や，地場の食材等にこだわった田舎料理体験事業，空き家を活用したロバートキャンベル氏監修による「キャンベル文庫カフェ“湯よみ文庫”」の設置や，湯治で出会う，秋の収穫祭をテーマとした「湯治ウィーク」の開催，若者やよそ者らでつくる鳴子温泉再生プロジェクトの立ち上げ等，既存の枠にとらわれない官民が一体となった取り組みを進めており，今後も温泉の魅力を活用し多くの方々に，温泉の計り知れない可能性を体感していただける温泉地を目指し，地域経済の活性化を目指してまいります。

郷土に学び、郷土を誇れる子どもを育てる教育
～地域の魅力を再発見し、ふるさと愛を育む～

三朝町立三朝小学校、三朝中学校

1． はじめに

鳥取県中部に位置する三朝町は、世界屈指のラジウム泉の「三朝温泉」と日本一危ない国宝と称される「国宝　投入堂」に年間約 35 万人の観光客が訪れる山陰有数の温泉地です。本町では本年 4 月に町内３小学校が統合し、「三朝小学校」となりました。小学生300人、三朝中学校生徒 180 人が、「やさしくたくましい　みささの子どもを育て生涯にわたって学ぶことができる町」の基本理念のもと、日々学習に励んでいます。

基本理念の柱の一つに「郷土を学び、郷土を誇れる子どもを育てる教育」=「ふるさと愛の醸成」を掲げています。これは、豊かな自然や歴史に触れ、ふるさとの優れた点や課題に気づき、その発展に貢献しようとする姿勢を育てるものです。

これは地域の先人を招き、直接話を聞いたり、副読本による郷土の歴史や自然についての学習を通して学習を深めるもので、具体的には、「世界屈指のラジウム温泉・三朝温泉、日本一危ない国宝　三佛寺投入堂があり、大勢の観光客が訪れる町」、「三徳山・三朝温泉が､『日本遺産』第１号の認定を受けた」ーなど子どもたちはふるさとの歴史や成り立ちを学び、ふるさと愛を育みます。

2． 三朝小学校３年生の総合的な学習

本町では、毎年小学校３年生が総合的な学習の時間に地域の魅力を再発見する学習を行っています。これは、三徳山・三朝温泉に関する歴史、特徴などを教室で学習するだけでなく、取組や課題を自主的に発見し、現地学習を行うことで深い学びに繋げるものです。

■実際の学習

今年度は、「地域の宝を知ろう！」というテーマで、3 年生 46 名が学習に取り組んでいます。その学習の中で、三朝温泉についても調べ学習を行い、町観光交流課の職員を招き、三朝温泉の由来・特徴・温泉の利用方法なども学習しました。大人から何となく聞いていた三朝温泉の由来、キュリー夫人が取り持つ縁、地域のマル秘スポット等を聞き、ますます三朝温泉が好きになりました。

その後、実際三朝温泉街に出かけ、地元の方の説明を交えながら各グループのテーマに沿って現地学習を行い、温泉の利用方法や、おもてなしの仕方等、意欲的な学習を展開しているところです。

また、この学習とは別に、運動会では昭和２年（1927）に作詞　野口雨情、作曲　中山晋平によって誕生した「三朝小唄」や現代風にアレンジした「三朝小唄アドバンス」を学習発表しており、地域に生まれた文化の伝承を行っています。

3． 三朝中学校の学習

三朝中学校では、小学校での学習成果を、これまで得た知識や情報を活用し、自校の PV 作成や各種コンテストへの応募国際理解教育（国際交流事業等）などに活かす取組に発展させています。

具体的には、学習した動画撮影の経験を活かし、町観光協会と連携し、『三朝 PR ビデオづくり』というテーマで、三朝温泉や三徳山等の優れた地域資源を撮影、編集し作品を作成します。

その作品は、姉妹都市交流を締結している、台湾台中市石岡國民中学やフランスのラマルー・レ・バン町との相互交流事業で三朝町の紹介 PV として発表する他、石岡國民中学では、両校の生徒が協働で作品を作成するなど、国際交流や三朝町及び日本文化の世界発信につなげています。

また、修学旅行での企業訪問の際には、本校及び町の紹介として、担当者に作品をプレゼンテーションしています。すると、『三朝町や三朝中のようすがよくわかりました。会社の旅行等で、三朝町を訪問してみたくなりました。』など、好意的な感想をいただくなど、町の PR にも一役かっています。

4． 今回の発表にあたって

今回の温泉を活用した健康づくり全国大会では、温育プログラムの発表を行います。発表内容は、三朝温泉の特徴、利用方法等の発表や歴史の寸劇、「三朝小唄アドバンス」、動画での魅力発表などです。私たちが後世に伝えていかなければならない『ＯＮＳＥＮの未来』は、『子どもたちが創る未来』と言えます。三朝町の児童・生徒が地域（温泉）の魅力を学ぶ取組が、三朝温泉を愛する想いとして、多くの方に伝わればと願っています。

「新・湯治セミナー in 三朝町～温泉を活用した地域の健康づくりへの挑戦」開催にあたって

コーディネーター
坂本 誠
さかもと　まこと
NPO法人
健康と温泉フォーラム専門委員

1975 年高知県生まれ。東京大学法学部、同大学院工学系研究科社会基盤工学専攻を経て、2007 年東京大学大学院農学生命科学研究科農業資源経済学専攻単位取得退学（途中高知県椿原町地域振興アドバイザーとして 1 年間赴任）。（財）とっとり政策総合研究センター、（独）農研機構農村工学研究所、全国町村会を経て 2015 年より現職。博士（農学）。農山漁村地域の持続発展策、道州制・市町村合併・地域自治組織など地方自治制度に関する研究を行う。

昨年に続いて、環境省・健康と温泉フォーラムの共催により「新・湯治セミナー in 三朝町」を開催いたします。

今年のテーマは「温泉を活用した地域の健康づくりへの挑戦」。各地の温泉は、来訪者だけでなく地元住民も含めた老若男女の健康を育む場であり、人々が交わり集うコミュニティ空間であり、文化を紡ぎ育む場でもあります。このような温泉のもつ地域資源としての多面的な価値を積極的に発信し、より多くの人々と理解を共有すること。温泉のもつ多様な可能性を積極的に提案し、それら可能性の実現に向けて自治体関係者も含めてより多くの仲間を巻き込むこと。これが温泉の継続的発展に向けた取り組みの第一歩ではないでしょうか。

では具体的に何をすればよいのか―温泉利用指導員など人材育成、住民の健康づくりにより強く働きかける温浴施設の整備や運営の方法、行政と温泉地の連携、温泉療法医との連携など外部との連携、そして温泉が地域住民のくらしにより深く根づくためになにができるのか…など課題は山積しています。セミナーでは、長湯温泉（大分県竹田市）、肘折温泉（山形県大蔵村）、そして開催地・三朝温泉の取り組みから、課題を共有し、今後の方向性を考えてみたいと思います。

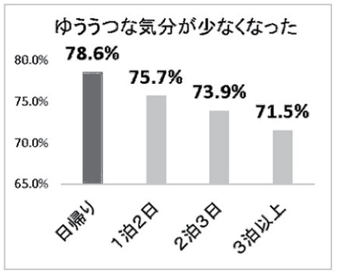
地域の健康づくりに果たす温泉の役割

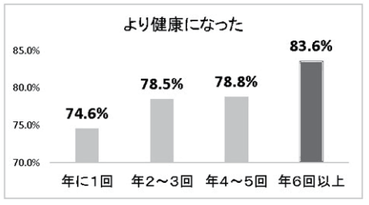
山本 麻衣
やまもと　まい
環境省自然環境局
自然環境整備課
温泉地保護利用推進室長

山口県生まれ。平成７年環境庁（当時）入庁。以来、環境省本省、地方環境事務所等において主に国立公園や野生生物の保護管理を担当、前職は長崎県に出向し自然環境課長として勤務。今年４月より現職

観光資源としてとらえられがちな温泉ですが、近所に住む方々の健康づくりにとっても重要な資源になり得ます。そもそも、「近所に温泉があっていつでも入れる」というのは、とてもうらやましいシチュエーションですから、活用しないのはもったいないです。

環境省が行った「全国『新・湯治』効果測定プロジェクト」において、温泉地を訪れた人の入浴前後の心身の状態の変化を調査したところ（20 温泉地で 4,180 人から回答）、80%を超える人が「より健康になった」、「ストレスが少なくなった」という変化を感じたという結果となりました。中でも印象的なのは、「ストレスが少なくなった」、「ゆううつな気分がなくなった」という項目については、１泊２日以上の宿泊を伴う旅行で訪れた人より、日帰りで訪れた人の方が肯定した人の割合が大きいことでした。また、年間に温泉に行く回数が多い人は、温泉によるよい効果を感じやすいという結果も出ています。





「世界に通用する個性的な温泉地づくり」～日本一の炭酸泉湧出を生かして～

首藤 勝次

しゅとう　かつじ

大分県　竹田市長

1953年生まれ
大分県竹田市出身。
1972年同志社大学入学。
1976年からの直入町役場職員時代に炭酸泉を縁としたドイツとの国際交流を推進し、姉妹都市締結を実現。
温泉療養文化館「御前湯」の初代館長を務めた後、退職。
大分県議会議員3期を経て
2009年4月より現職となり、
数々の先進的な政策を展開。
2004年国土交通省「観光カリスマ」認定
2015年温泉功労者環境大臣賞2016年マニュフェスト大賞優秀賞受賞。

今回、鳥取県三朝町で新・湯治セミナー「温泉を活用した地域の健康づくりへの挑戦」というテーマで温泉資源の利活用、温泉地のあり方を議論できることは社会保障費の膨張化、超高齢化社会を迎えるわが国にとって絶妙なタイミングであろう。

私がこのフォーラムと出会ったのは平成 3 年、山形県天童市で開催された大会であった。中心的に企画運営を指揮していたのが合田純人氏だったが、当時は全国各地の温泉地はもちろん、海外の温泉地からも講師が招かれ、さらに環境省、厚労省などの政府機関も参加した。加えて、要となる医師団や健康づくりをテーマにする企業の参加も少なくはなかった。だから大会は大盛況で、専門的議論を構築した成果報告書も充実したものであった。

あれから 30 年、それ以前からもフォーラムは開催されていたから昭和・平成・令和と時代を超えて、温泉による健康づくりを提唱してきたことになる。ずっと継続して志高いビジョンを掲げて取り組みをされてきた関係者に心から敬意を表するものである。

その間、市町村合併を越えて、わが竹田市も旧直入町時代からの「世界に通用する個性的な温泉地づくり」のテーマのもと、ドイツ・イタリア等との温泉文化交流を続け、さらには世界的にも稀有な炭酸泉を核にした戦略を展開しているところである。

ヨーロッパの温泉地との交流で最も勉強してきたのが、温泉地における療養環境の整備と保険制度の活用、さらにはエビデンスの構築である。
幸いにして、姉妹都市となったドイツ・バートクロツィンゲン市に学ぶことができ、その交流は今年で 30 周年を迎えた。交流人口は中学生を含めて 850 人に達する。教えられたのは、温泉療養・保養客を迎える温泉施設のあり方であった。

幸いにして、2016 年に竹田市は北海道の豊富町とともに温泉利用型健康増進施設（連携型）に厚労省から認定された。温泉療養文化館「御前湯」と B&G 体育館の連携がそれである。一方、今年の 6 月、待望のクアハウスが世界的建築家の坂茂氏の手によって完成しグランドオープンを迎えた。

加えて、炭酸泉によるエビデンス調査や温泉利用指導者や温泉入浴指導員の養成活動にも地方創生の国家予算が投入されたのは幸運であった。ちなみに、クアハウスにも地方創生・拠点施設整備交付金として 1 億 8 千万円が対象事業費として認可された。

さらに。今年度もこれまでの継続調査としてあらためて地方創生の予算が獲得できたのは、まさに『健康と温泉』というキーワードが国策として新たな視点づくりに寄与できるという先導性が宿っているからにほかならない。

さて。ここからである。これまでのように、温泉地に行けば心身ともにリフレッシュできますよと、一般的に理解されている観光戦略のレベルでの取り組みから、いかに進化させることができるかである。

竹田市と豊富町での認可は、イメージではなく実質的な健康づくりへの効果を問われていると考えなければならないと思う。
イタリアのアバノでホテル王として活躍してきたマッシモ氏は、ファンゴ（泥浴）の効果を国に実証してみせ、そして国から施設利用費の半額を補てんさせるという快挙を成し遂げた。
このたび、現地でマッシモ氏と再会し、その取り組みの過程やシステムを実際に体験して何を得たか。

それは、一言で言えば、温泉地の人々の熱意が導いた結果だということ。
温泉が健康づくりに最適で、そうすることによって予防医療を実現し、自然治癒能力を高める。その結果として、国民の医療費を抑制できて財政の硬直化を防いできたという事実。マッシモ氏が先頭を走り、このサイクルを信じて自ら研究費を集め、息の長いエビデンス調査をまとめ上げて国を説得した人々の熱意は尊敬に値する。

高齢化が急速に進み、医療費が膨張を続ける日本にあって、いまこそ政策転換することが大切であろう。

観光資源としてだけでなく、健康づくり資源としての温泉力をみんなで訴え続けていきたいものである。

もう、待ったなしである。

◎竹田市内の有資格者数（2019 年 9 月末現在）
温泉入浴指導員　96 人取得
温泉利用指導者　5 人取得
竹田市総合インストラクター　52 人取得
※竹田市の地域資源（温泉・自然環境など）を活用した運動指導等のスキルを有する人材を独自に養成・認定する制度
B&G 体育館トレーニングルームの指導、クアハウスでの湯中運動サポート、市民向け健康運動教室の指導、ヘルスツーリズム認証商品のガイドなどで活躍中
◎温泉療養複合施設「クアパーク長湯」
源泉かけ流しの高濃度炭酸泉を活用したおよそ 50mの歩行浴、湯中運動浴槽を完備したクアハウスを中核とし、長期滞在可能な 14 棟のクアホテル、地元野菜など旬な食材を活かしたクアレストラン。
今年 6 月 2 日グランドオープン　設計は世界的建築家 坂 茂 氏

肘折温泉郷と温泉療養相談所について

荒川 光昭

あらかわ　みつあき

山形県大蔵村診療所所長

1960 年山形県最上郡生まれ
1986 年秋田大学医学部卒業
　山形県立中央病院外科勤務
1992 年大蔵村診療所勤務
1995 年大蔵村診療所所長
　肘折温泉郷温泉療養相談所所長
　日本温泉気候物理医学会
　温泉療法医
2000 年 同 評議員
認定温泉療法専門医 2
008 年 ~2011 年
　山形県温泉療法研究会会長

1.肘折温泉郷

山形県出羽三山の主峰月山の裾野に位置する自然豊かな温泉郷です。、肘折カルデラと呼ばれる約1万年前に形成されたカルデラの東端に位置し、肘折温泉、黄金温泉、石抱温泉と共に温泉郷を形成しています。肘折温泉の歴史は古く大同年間（807年）、豊後の国出身の源翁がこの地を訪れた際に、老僧より肘を折った時に治療した温泉を教えられたことが肘折温泉の由来で、開湯より千二百年余りの歴史を有しております。信仰の山出羽三山の登山口、八方七口の一つでもある肘折口は、山岳信仰の最盛期であった1700年頃には白装束で登拝する人々が絶えることなく続く日があったと記録されています。古くは出羽三山の山岳信仰と共に栄えましたが、近年は近郷近在の農家の方々が農閑期に骨休めをする湯治場として親しまれています。その名の通り「骨折、疵に肘折温泉」と言い伝えられる肘折温泉の泉質は、ナトリウム一塩化物炭酸水素塩泉。ナトリウム一塩化物泉は、保温効果の高い「あたたまりの湯」として、ナトリウム一炭酸水素塩泉は、皮膚の清浄化作用の高い「美人の湯」として知られています。また珍しい炭酸泉の冷鉱泉も湧出しております。肘折温泉郷の旅館は20数軒、どの旅館もかけ流しの湯三昧。また湯治場らしく自炊場が設けられている旅館も多く、持参した食材や名物の朝市で購入した旬の食材を使って気ままに食事を楽しむこともできます。豊かな自然環境と温泉の効能を活かした、おもに保養や療養を目的とした温泉地です。

2.肘折温泉郷イベント

名物朝市　肘折温泉の朝は、朝市のお母さんとお客さんの明るいやり取りから始まります。4月下旬から11月まで季節の旬の野菜やキノコ,自家製の総菜などが並びます。

肘折温泉開湯祭　開湯の日とされる7月14日執り行われる神事、地蔵神輿行列や開湯餅まきなどが行われ、湯の神様に感謝し長い間温泉を守ってきた先人の偉業をたたえます。

なめこ・こけし祭り　11月11日　秋の収穫に感謝し特製のなめこ汁などがふるまわれます。また約120年の歴史を持つ肘折こけしの展示、販売会も行われます。

肘折さんげさんげ　1月7日　出羽三山に古くから伝わる山伏たちの年越し行事。精進潔斎し白装束に身を包んだ村の男たちが、五穀豊穣、無病息災を祈願し法螺貝の合図で温泉街を練り歩きます。

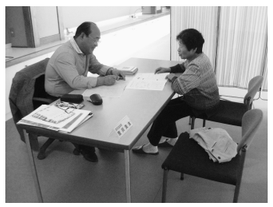
ひじおりの灯　7月下旬～9月中旬　肘折夜市
春から秋の週末（不定期）　夏の夜の温泉街に灯籠が点々と灯ります。灯籠は、肘折温泉の自然や景観、暮らしや湯治文化などアーチストが肘折に滞在し取材して制作します。

肘折幻想雪回廊　1月下旬～2月上旬土曜日　おおくら雪ものがたり　3月21日
地面出し競争WorldCupin肘折　2月23日
冬は全国屈指の豪雪地帯、肘折ならでのイベントが続きます。3mを超える雪の壁にろうそくが輝く幻想雪回廊、大きな雪だるまや冬の花火大会の雪ものがたり、いかに速く雪を掘って地面を出すか競う地面出し競争など豪雪を逆手に取った行事が続きます。

出羽三山信仰との結びつきや湯治場として歌人斎藤茂吉も愛した肘折温泉郷は、今でも多くの人々に親しまれ、そして訪れる人を癒し続けています。その湯の効能は広く内外に知られ、平成元年に国民保養温泉地、平成3年にはさらに国民保健温泉地に指定されました。

3.肘折温泉療養相談所について

肘折温泉療養相談所は平成3年、山形県のモデル事業として始められた。国民保養温泉地、国民保健温泉地の指定を受け、当時の保健所長をしていた片桐進先生が、温泉の利用を経験に頼っていた湯治利用者がより安全により効果的に行えるように、温泉療法医の知識を活用してもらおうとソフト事業として立ち上げた。大蔵村および肘折温泉郷振興会の理解を得られ、共催で事業が始められた。当初は温泉街の中央にある山形交通バスの待合所を利用して行われ、受付業務を地元温泉街の人、村の保健師、看護師が、簡単な問診と血圧測定、希望者に尿検査を行い温泉療法医が指導するという形で行った。血圧測定、尿検査はいろいろな基礎疾患を抱える利用者が多いため、より安全に利用してもらうために、また長期滞在者のうち希望者の血液検査なども含めて肘折温泉の身体に与える影響の研究に利用させていただいた。療養相談所を温泉の中心地に開設したこと、無料で医師の相談を受けられることもあり利用者は大変多く温泉療法医の話も好評を得た。また年間を通し、救急搬送される温泉利用者が大幅に減少した。山形県のモデル事業としての期間は2年で終了したが、継続を望む声が多く以後大蔵村、肘折温泉郷振興会の事業として行っている。山形県のモデル事業ではあったが、他の地域ではおもに温泉療法医の確保が難しく同様の事業を立ち上げたところはない。平成10年、日帰り入浴施設"いでゆ館"の開設もあり、温泉療養相談所も同館に移動した。温泉街より少し遠くなり、



冬は歩行障害のある方などは、施設のバスにて送り迎えをすることとしている。温泉療養相談所が10年経過した時点で、利用者の傾向を調べている。湯治利用者の年齢構成は、60代以降がほとんどで70代が最も大かった。来湯目的は、腰痛、膝痛、肩痛そしてけがや手術後の療養が多かった。基礎疾患として、高血圧や糖尿病、心血管疾患が多く8割の方が何らかの病気で治療中であった。職業は農業が多いが、来湯者の年齢構成からすでにリタイアされ無職の人も多かった。滞在期間は、2週間以内が多いが、中には1か月の滞在者もいた。最近は、年齢構成、来湯目的、基礎疾患に大きな変化はないが、滞在期間は1週間以内が多くなっている。温泉療法医としての指導は、簡単な問診の結果から基礎疾患の治療状況と症状を確認することから始めている。まずは安全に温泉を利用していただくために、温泉入浴が病気に与える影響について、日本温泉気候物理医学会発刊の温泉療養マニュアルを利用したパネルを作成し説明をしている。学会での報告にもあるように、入浴関連死亡が交通事故死をはるかに超える年間2万人弱と推定されており、病気に与える影響を理解していただくことは重要なことと考えている。その後に来湯目的である症状や滞在期間について伺い入浴方法について説明をさせていただく。症状は一人一人が異なるために指導はケースバイケースとなることが多いが、温泉地での過ごし方と基本的な入浴方法、患部の保温のための部分浴の利用、関節の可動域改善、筋拘縮の改善のための運動指導などを行う。基礎疾患に高血圧症や糖尿病、肥満の方が多く、また筋力の低下されている高齢者の方も多い。滞在中の食事や運動についても話をさせていただく。食事指導は、保健所の協力をいただいた主な旅館の湯治食の栄養分析の結果や女将会と栄養士が検討した療養食などを参考にしている。運動指導は、温泉街の散歩コース“歩か歩かルート（ぽかぽかルート）”でのウォーキングを勧めている。このルートは、山形大学の協力を得て所要時間や消費カロリーの目安もある。最近村の有志で作ったパークゴルフ場もあり利用を勧めている。温泉の泉質に興味を示される方も多く、9つの療養泉の特徴について説明することも多い。相談の最後にはリーフレット“温泉でゆっくり健康づくり”を渡し、基本的な事項と指導内容について確認している。

以上、基本的な指導は、日本温泉気候物理医学会編の温泉療養について、適応症、禁忌症などを参考としている。

定期的な温泉療養相談以外にも次のようなことを行つている。温泉療養相談についてや温泉を利用した健康教室のストレスの改善についてなどの研究報告。肘折温泉療養相談Ｑ＆Ａ、肘折温泉療養体験談集をまとめ各旅館においてもらう。国民文化祭・やまがた2003では、大蔵村の「肘折」温泉文化の祭典の中で、温泉健康相談拡大版として温泉療法医4名による療養相談を行っている。肘折温泉振興会が温泉ファンを増やし、温泉の利用・楽しみ方を普及すること、温泉関係者の知識を高め、資質向上を図る目的で立ち上げたスパリエ協会の指導、助言。肘折温泉　温泉ドクターアドバイス付き湯治プランへの協力など。

また、大蔵村の事業関係では健康の保持増進、介護予防のために、検診結果説明会や介護予防教室、高齢者大学“長寿の森”、敬老会などの開催時を利用して温泉の効能や入浴方法を紹介している。これは山形県内の市町村別の保健事業費と老人医療費の相関が、保健事業費が多いほど老人医療費が減少するとの報告に基づいており、温泉利用を積極的に保健事業に活用している。

温泉療養相談の事業実績では、平成3年立ち上げより4年間は、6月、7月、9月、10月の毎週土曜日の開催で、温泉療法医　片桐先生1名　相談者数は平均で十数人となっている。平成7年より温泉療法医2名体制となり、また平成12年より期間は同じだが週2回開催としている。利用者は平均10人程度となっている。平成20年　片桐先生が退かれ温泉療法医が私1人となり、開催期間は同じだが月2回と開催日が減少した。利用者は徐々に減少し最近は平均で3,4人となっている。肘折温泉のホームページ利用や機会をとらえて周知したり、旅館で開催を知らせてもらっているがなかなか利用者の増加にはつながっていない。温泉療法医の都合で不定期の開催となることが多いことや、来湯目的の変化、長期の湯治利用者の減少などが原因と考えている。

日本は古くから湯治という形で、温泉を利用した健康づくりをしてきました。湯治は心身を癒すだけでなく、次の仕事のための体力づくりや栄養摂取の場であり、またいろいろな地域から集まって来る人々とのコミュニケーションの場所でもありました。これはこれからの健康づくりを考えるうえで非常に大切なことです。温泉に行ったら、気候や景観など自然の恵みを肌で感じながら適度な運動も心がける。地場のもの、旬のものを減塩やカロリーコントロールに留意しながら食べる。地元の人や同じ温泉利用者に声をかけ話をする。そしてゆっくりと温泉につかる。温泉地は、運動、休養、栄養、そして癒しが一緒にできる場です。生活習慣病の予防や健康づくりに最適な場であると思います。今後も温泉療養相談を通して温泉地の利用拡大や健康づくりに協力していきたいと考えています。

三朝温泉の魅力

新藤 祐一

しんどう　ゆういち

特定非営利法人
ＮＰＯみささ温泉　理事長

昭和31年生まれ
昭和54年日本大学農獣医学部卒業
昭和55年株式会社新藤入社
平成10年株式会社新藤代表取締役社長就任（現職）
平成18年ＮＰＯみささ温泉を立ち上げ初代理事長（現職）
平成25年～平成31年三朝温泉観光協会会長
令和元年三朝温泉観光協会顧問（現職）

三徳山上流俵原高原と、小鹿渓谷を源流とする三朝川。子供のころからドンドの水の音を聞いて育ってきた。ドンド、正式にはなんと言うのかよく知らないが、川床砂が流されて、地下の温泉層に影響を与えないために作られたと私は聞いたが、いわゆる川の中の堤防だ。このドンドが、三朝温泉の三朝川には、いくつかある。水の落ちる音「ドドド」という音が、24時間365日、山合の温泉町に、この川で暮らす、カジカ蛙、鴨、白鷺、山々の鳥たちの、鳴き声の伴奏をしている。川沿いを散歩し、耳を澄ますと、子供の頃に感じた、大きなものに包まれるような暖かさを感じる。多くの有名な歌人が、ここ三朝の地で歌を読んでいる。頷ける。このドンドには、マイナスイオンの効果もあるのではと、私は思うのであるが、三朝温泉の魅力の第一は、この三朝川である。

またなんと言っても、世界有数のラドン含有量を誇る温泉の泉質であることは、周知の事実であろう。三朝大橋の上流にある露天風呂は、温泉街に生まれ、自宅に風呂の無かった私たちにとっては、マイバスであった。今思うと不思議な気もするが、子供の頃は、いつもこの風呂を自分の風呂として、毎日浴びていた。冬の寒い時等は、熱い風呂に入る時だけは少々苦しいのだが、一度入ってしまうと、水道水を沸かした風呂とは全く違い、湯のあたたかさが、まろやかで心地よく、零下の日でも風呂から上がって当分さめる事が無い。夏になると、風呂に入って、川で泳いで風呂に入る、なんともマナーの悪いことだが、これがなんとも子供の頃には楽しかった。三朝温泉の魅力の大きな柱は、この河原風呂と共にある小さな外湯だ。地元の人たちは、マイバスとして、観光のお客さんや周辺地から三朝の温泉に入りたいと来られる皆さんとの、裸の交流の場である。まちが輝く、人と人との交流、これこそが私の愛するまち、三朝温泉。

三朝大橋のたもと、ほっとプラ座の隣にある共同浴場を、平成20年4月に三朝町とＮＰＯみささ温泉の官民協力の下、改装しリニューアルオープンを果たした。三朝温泉の魅力はやはり温泉だ。地域が活気を呈する素は、人の顔が見えること、そしてそこに交流があることであると思う。この共同浴場のリニューアル時に、「たまわりの湯」と改名した。公募による命名で、先人の恩恵、自然の恵みに感謝しての名前である。三朝温泉を訪れた、観光のお客様が三朝川のたもとを散歩し、多くの歌人の歌碑に触れ、自然溢れる情緒を感じ散策した後、地元の人たちも入浴している外湯で、汗を流し交流を果たす。裸の付き合いが、突然訪れた温泉で忘れられない思い出となる。そんな想いでのＮＰＯ活動である。ＮＰＯみささ温泉は、自分たちの町は自分たちの手でと誓う、独立心旺盛な町の中の皆さんがメンバーである。入会金100,000円という個人としては高いハードルに、27人もの人たちが参加している。なかには三朝温泉に想いを寄せる倉吉市在住メンバー、湯梨浜町在住メンバーもいる。「たまわりの湯」の受付は、ＮＰＯみささ温泉の事務室も併用し、右隣には「森の樹カフェ」（カウンターカフェ）左隣には「ぼちゃぼちゃ」（特産品などのショップ）を併設した。「温泉の中心に賑わいを」というメンバーの想いが満ち溢れた。浴槽は、タイル原石を古いまま使い補修を施した。お湯は、勿論源泉そのまま、温度調整のため水が混じるが、正真正銘の源泉かけ流しである。お湯の濁りや浄化の為に、循環させる方法があるらしいが、一切その方法は使用していない。よって、停電や大水が出たときにお湯が濁る。これが源泉そのままの証拠、これもまた情緒がある。

先人の偉業に感謝を忘れず、自然の恵みをそのままに、まちが輝く、人と人との交流、これこそが私の愛するまち、三朝温泉。

850年以上の歴史があるという歴史的な三朝温泉。三朝川の両岸に立ち並ぶ旅館は、伝統的な和風旅館が多い。それぞれ特徴的で、団体観光を目的としたもの、個人の少人数グループをターゲットにしたもの、保養や連泊を得意とする旅館、それぞれが特徴的で個性がある。総じて、接客と人情溢れる対応が売り物で、日本でも有数の料理旅館が多い。平井伸治鳥取県知事の「食のみやこ鳥取」構想も、三朝温泉の旅館の料理が発想の原点であるのかとも思われる。諸外国も含め、色々なところでプロの料理を食する事があるが、三朝温泉の料理の美味しさは格別である。自分の生まれ育った土地、食材一部が自社からという、ひいき目を差し引いても、素材の良さ、食味、構成、色合いと、世界に十分通用して余りある料理が随所に見られる。三朝温泉の魅力の中に、人情溢れる接客、すばらしい料理を作る技、それをコーディネートしてお客様に満足を与える材。近年の不況、構造の変化により、町の中の財力は低下傾向にあるが、先人からのたゆまぬ努力によって培われた、人力、技術は三朝温泉の宝である。先人の偉業へ感謝を忘れず、大事なものを守り続け、温泉を訪れる人々に感動を与え続ける町。これこそが私の愛するまち、三朝温泉。

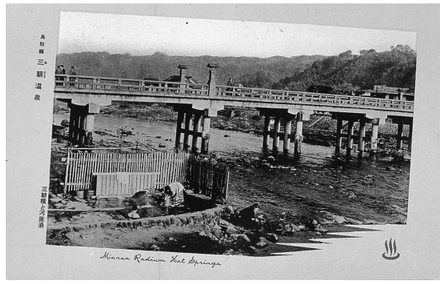
特定非営利法人ＮＰＯみささ温泉は「三朝温泉に対して、空き店舗の有効利用並びに広範囲で一体感のある三朝温泉街形成に関する事業を行い、三朝温泉活性

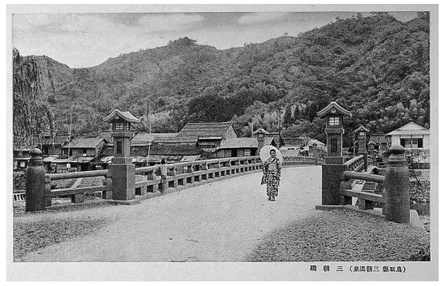
化に寄与することを目的とする。」と事業目的を掲げ、平成 18 年にこの団体を立ち上げた。平成 22 年には、岡山大学病院三朝医療センター分室において、医療機関の施設を一般にも開放されるという全国でも例のない事業「ラドン熱気浴」を受託管理運営してきた。

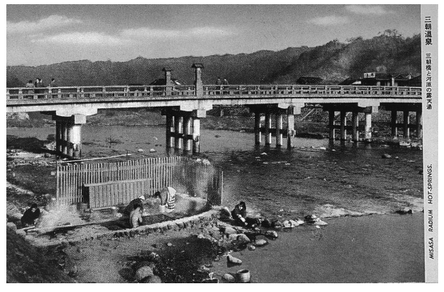
平成 28 年 10 月 21 日の鳥取県中部地震後、大正初期建造の為の耐震構造の不備で事業を中断せざるを得なかった。しかし、再開を待つ利用者からの問い合わせは途切れることがなく、利用者のこの施設へすがる想いを乗せた手紙が相次いだことが、再開への原動力となったことは言うまでもない。大正の時代から温泉に関わる施設として活用され、数年前まで医療機関が治療の一環としてリハビリ等に「ラドン熱気浴」を利用してきたこと、この度の地震後常連利用者から施設への熱い思いで、必要とされる施設であることを痛感し、再び官民一体の挑戦がはじまった。国から三朝町が貴重な財産として取得、旧施設を解体して新施設として再生を計画した。指定管理者として公募に対し応募し、我々がこれを受託したことは、実績を踏まえた周囲の総意であるところに疑いは無い。

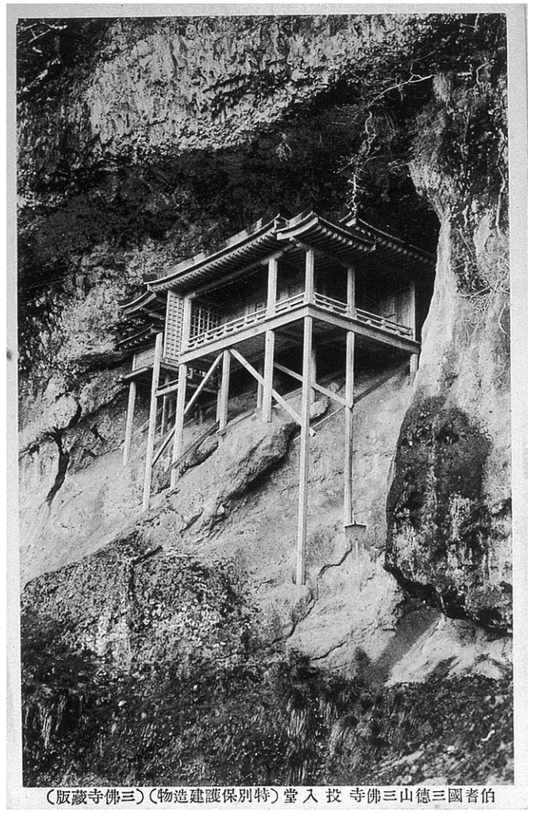
何よりも「健康でありたい」と願う全国の人の想いに応えるのが我々の役目である。生きる力を与えてくれる自然のラドン温泉を生かした「熱気浴施設」。通常入浴では、短時間しか浴室に入っていられないが、吸う温泉・・・熱気浴であれば、ラドン効果を存分に享受できるのだと感じる。この効果を全国に拡散していくことが、我々の役割である。

「健康で長生き」をテーマに「自然」「人情」「食」「スポーツ」「温泉」を構成しながら、人にやさしいラドンの温泉町を･･･、そして関わる全ての人を幸せにする三朝温泉を創造していく。これこそが私の愛するまち、三朝温泉。









＊鳥取県立博物館所蔵資料

温泉活用による健康増進について

三友 紀男
みとも　としお

NPO法人
健康と温泉フォーラム会
日本温泉気候物理医学会
温泉療法医会 会長

1. はじめに

日本人は極めて温泉好きな国民である。宇宙飛行から帰還した向井千秋氏や野口聡一氏は、帰還直後に、まず何をしたいかと尋ねられ、二人とも同様に「温泉に行って日本酒を飲みたい」と答えている。
温泉は、昭和２３年に制定された「温泉法」により、地中から湧出する温水、鉱水及び水蒸気その他のガス（炭化水素を主成分とする天然ガスを除く）で、
１．温度（温泉源から採取される時の温度）
　摂氏 25 度以上
２．物質（19 種のうち、いずれか一つを
　一定基準以上含有）
の条件を満たすものと定義されている。

また、温泉（水蒸気その他のガスを除く）のうち、以下の温度又は物質を含有するものを特に治療の目的に供しうるものとして療養泉としている。

温度（源泉から採取されるときの温度）
摂氏 25 度以上
物質（以下に掲げる 6 種のうち、いずれか一つ以上）
遊離二酸化炭素・総鉄イオン・水素イオン・よう化物イオン・ 総硫黄・ラドン

環境省温泉利用状況調査（2017）によれば、日本全国に源泉は 27,287 本あり、都道府県別では大分県が最も多く、兵庫県には 440 本あり、第 18 位である。

その利用形態の概略は、観光的利用だ 7 割強、健康的利用が 10%弱、その他農漁業的利用、工業的利用が 2 割前後と言われている。私がおります宮城県では伝統的に湯治が盛んでその結果、観光的な利用が 40%、保健的利用が 30%と全国的な傾向に比して保健的利用が活発である。湯治は正月の湯、春湯治、早苗響（さなぶり）の湯、盂蘭盆の湯などと言われ、季節や農作業の変わり目に親類縁者で湯治場へ出かける風習があり、少なくはなったとはいえ現在でも続いている。

2. 生体に与える温泉作用

日本人の温泉浴の特徴は、高温、頻回、クール浴である。この入浴法は血糖低下、肝臓の解毒機能を亢進、免疫抗体産生の亢進、自律神経の調整安定化作用があることが知られている。一方、湯あたりのリスクも存在する。

温泉による作用機転は、温熱作用、機械的物理的作用（水圧と浮力）、化学的作用（泉質）等に加えていわゆる温泉作用と言われる総合的調整作用が加わって、総合的に生体に作用するものと解されている。これらを利用して各種の温泉治療が行われている。

3. 安全入浴―正しい温泉の入り方 --

温泉浴にもリスクがある。2014 年（平成 26）に温泉法の改正があり、その第 18 条第 1 項の規定に基づく「禁忌症及び入浴又は飲用上の注意の掲示等の基準」において、「禁忌症は、1 回の温泉浴でも有害を生ずる危険性がある病気・病態である。なお、禁忌症にあたる場合でも、専門的知識を有する医師（温泉療法医等）の指導のもとに温泉療養を行うことは妨げない」とされ、一般的禁忌症（浴用）として、
・病気の活動期（特に熱のあるとき）
・活動性の結核、進行した悪性腫瘍または高度の貧血など身体衰弱の著しい場合
・少し動くと息苦しくなるような重い心臓または肺の病気、むくみのあるような重い腎臓の病気
・消化管出血、目に見える出血があるとき
・慢性の病気の急性増悪期
をあげている。

そこで、正しい温泉の入り方として、次のような注意が一般的に行われている。
１．かけ湯は念入りに
２．負担の少ない半身浴から
３．最初は 1 日 1 回から、慣れても 3 回まで
４．長湯は禁物、最初は 3 分程度から、高齢者や高血圧・動脈硬化・脳血管障害のある人は額に汗・動悸が出る前までに
５．空腹時・食直後・飲酒後・激しい運動直後は避ける
６．浴後はシャワーを浴びずに休息を

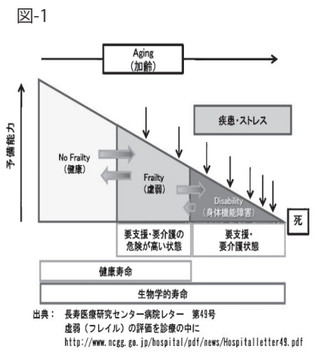
高齢化が進行し、また高齢独居者が増えている現在の我が国において、家庭での入浴においても、この問題は重要である。東京都救急協会では全国で年間 14,000 人が入浴関連事故で死亡していると推計している。1970 年（昭和 45）には全国で年間 16,765 人が交通事故で死亡していたが、種々の対策の結果、約 50 年を要して 2018 年（平成 30）には 3,532 人に減少させることができている。入浴関連死亡についても、減少への各種の努力が必要である。東京都防災救急協会では入浴事故を防ぐために以下の 5 か条を周知させる活動をしている。
(1) 入浴前に脱衣所や浴室を暖める
(2) 湯温は 41 度以下、湯につかる時間は 10 分までを目安に
(3) 浴槽から急に立ち上がらない
(4) アルコールが抜けるまで、また、食後すぐの入浴は控える
(5) 入浴する前に同居者に一声掛けて、見回ってもらう
また、消費者庁では、入浴者の異常を発見した場合の対処法として、
（１）浴槽の栓を抜く。大声で助けを呼び、人を集める。
（２）入浴者を出せるようであれば浴槽内から救出する。ただちに救急車を要請する（出せないようであれば、蓋に上半身を乗せるなど

沈まないようにする)。
（3）浴槽から出せた場合は、肩を叩きながら声をかけ、反応があるか確認する。
（4）反応がない場合は呼吸を確認する。
（5）呼吸が無い場合には胸骨圧迫を開始する。
（6）人工呼吸ができるようであれば、胸骨圧迫 30 回、人工呼吸 2 回を繰り返す。できなければ胸骨圧迫のみ続ける。

4. 入浴習慣と健康

愛媛大学小原らは、2006 ～ 13 年の高齢ドック受診者 873 人について、数種の循環器機能を示す指標と入浴習慣の関連性を調査したところ、上腕～足首間脈波伝播速度と B 型ナトリウム利尿ペプチド（BNP）値が、週 5 回以上の入浴を習慣とする群で他の群に比して有意に低下していたことを報告した。このことは入浴習慣が心血管病の死亡リスクを軽減させる可能性を示唆している。また、千葉大学八木ら（2018）は要介護認定を受けていない高齢者 13,786 人について 3 年間の介護保険移行率と入浴習慣の関連性を調査した。その結果、週 7 日入浴する群では週 1-2 日しか入浴しない群に比較して、その移行率が 29%低いと報告している。このことは、入浴は高齢者の健康維持に役立っている可能性を示唆するものであろう。

図-1



出典： 長寿医療研究センター病院レター 第49号
虚弱（フレイル）の評価を診療の中に
http://www.ncgg.go.jp/hospital/pdf/news/Hospitalletter48.pdf

5. 温泉の保健的利用をめぐる関心の背景、温泉医療の役割の変化

未だ経験したことのない超高齢社会を迎え、高齢者の健康を如何に確保し、健康寿命を延伸していくかが重要な課題となっている。ヒトは要支援要介護の時期を経て死に至るが、その前の時期、要支援要介護状態を迎える危険が高い時期（フレイル：虚弱、図 -1）において、その時期を見逃すことなく適切な対応を取ることが、健康寿命の延伸にとって重要であることが叫ばれるようになった。また一方、バブル崩壊の以後、特に温泉の観光的利用から保健的利用への展開が高まってきた。その最大の背景は、少子高齢化社会の到来と高齢者医療費の高騰であり、また自然回帰志向の高まりでもあろう。

温泉の保健的利用について、①疾患の予防や健康増進への応用、②疾患治療への応用、③リハおよび病後保養への応用などの側面があるが、従来②の側面が強調されすぎた傾向を指摘し、各種疾患に対する薬物療法、手術療法などの進歩も相まって、①や③の側面の重要性を指摘する機運が多方面から高まってきた。

6. 国の健康づくり対策

来るべき高齢社会を見据えて国は国民の健康づくり施策に、1978 年（昭和 53）の第 1 次健康づくり対策以降、各種の取り組みを実施してきた。約 10 年毎に見直しをし、2013 年（平成 25）からは第 4 次国民健康づくり対策、健康日本 21 第 2 次が取り組まれている。

2000 年（平成 12）から始まった健康日本 21 は、生活習慣の改善、健診の充実から各種危険因子の低減を図り、以って癌・循環器・糖尿病などを減少させ、機能障害を予防し、高齢者の健康を維持させようとするものであった。
その最終評価において、掲げた 59 項目中の約 60%の項目において一定の改善が認められた。

そこで、2013 年からの健康日本 21 第 2 次では、「健康寿命の延伸及び健康格差の縮小の実現に向けて、生活習慣病の発症予防や重症化予防を図るとともに、社会生活を営むために必要な機能の維持及び向上を目指し、これらの目標達成のために、生活習慣の改善及び社会環境の整備に取り組むこと」を目標として掲げている。概念として、生活習慣の改善や社会環境の改善を基にして、生活習慣病の発症予防・重症化予防や各種の健康資源へのアクセスの改善と公平性の確保により、社会生活機能の維持・向上や社会参加の機会の増加をもたらし生活の質や社会環境の質の向上を生むことで、結果として健康寿命の延伸と健康格差の縮小を得て、全ての国民が共に支え合い、健やかで心豊かに生活できる活力ある社会の実現を期待する計画である。そして、具体的目標として①こころの健康、②次世代の健康、③高齢者の健康につき具体的に掲げている。さらに、癌、循環器疾患、糖尿病、慢性閉塞性肺疾患は重要 4 疾患や栄養・食生活、身体活動・運動、休養などについてより具体的な目標が掲げている（表 -1,2,3）。それらに対する具体的な手法については多くは記されていないが、それらの具体的な目標を見ると、その取り組みに温泉を利活用した取り組みが期待されるものが多くみられ、温泉を有する地域においてはその取り組みが期待されるのである。

7. シニア層の国内宿泊旅行拡大に関する研究：国土交通省（2016、平成 28）

国土交通省国土交通政策研究所では「車いす、足腰が不安なシニア層の国内宿泊旅行拡大に関する調査研究」を行い HP 上に公表した。日本の人口減少は国内宿泊旅行市場の減少をもたらし、宿泊旅行延べ人数は 2014 年の 1.60 億人から 2040 年には 1.35 億人、さらに 1.09 億人への減少が予想されている。これを年齢別の宿泊旅行回数を見ると、60 歳代での年間 1.4 泊から 70 歳代になると 1.0 泊へと激減する。この激減を食い止め、70 歳以上の高齢者が 60 歳代と同様に宿泊旅行をすれば、高齢人口の増も相まって、2050 年には約 1 兆 3,400 億円の増加がもたらせる。高齢者が旅行に出ない理由を分析すると、健康上の理由が約 30%を占め、それは加齢に伴う運動器をはじめとする各種の身体的な衰えによることにあることが明らかとなった。さらに、家族を介護している 800 人を対象としたアンケートの結果を見ると、温泉旅行が最も多く、高齢者においても日本人の温泉好きを示している。旅行に対する不安・困難さについてのアンケートでは、入浴・トイレ・移動での困難さが高いことを示している。しかし、その程度は、旅行非経験者で最も高く、次に旅行経験者の旅行前であり、旅行後においては最も低くなっている。すなわち、取り越し苦労をしていることがうかがわれる。このアンケートをまとめると、旅行に対する過剰な不安から旅行をあきらめる人が多く、結果として旅行人数の減少をもたらしていることが分かるが、旅行をした人の満足度は極めて高い。取り越し苦労も多いが、入浴・トイレ・移動の困難度は高い。要介護者が旅行するための設備やサービスが不足しており、その情報の少ないことも分かる。今後の取り組みとして、
(1) バリアフリーに向けたハード対策
・交通分野のバリアフリー化は進んでいるが、宿泊施設のバリアフリー化は遅れていると思われる。
(2) ユニバーサルツーリズムの普及に向けた地域の受入拠点
・ユニバーサルツーリズムの地域の受入拠点の整備が進められているが、一部の地域に限定される。
(3) 旅行会社の取組
・介護旅行専門会社や大手旅行会社による商品開発が進みつつあるが、前者は認知度が低く、利用が進んでいない。後者は一般向けにパンフレット等での周知がなされておらず、認知されていない。
(4) 宿泊施設のバリアフリー情報提供
などの取り組みが期待されている。

また、この研究時において 16 の県で介護事業者と連携して宿泊施設での入浴介助サービスが提供されていた。今後これらが、介護保険の対象にすることが出来れば、普及する可能性が高い。

8. むすび

以上、温泉を取り巻く環境の一端を紹介した。皆さんが、天から与えられた自然の恵みである温泉資源を有効に利活用して、地域住民、近隣住民の健康増進、福祉に供する健康文化を構築していくことを期待し、そのお役に立てれば幸いである。

NPO 法人健康と温泉フォーラム

発足　1986 年（昭和 61 年）　：　2016 年で設立 30 周年
初代会長　大島良雄先生
温泉保養地に関係するあらゆる分野の専門家で組織
理念と目的
健康で活力ある社会の構築
温泉の健康的利用促進の啓蒙・普及活動
温泉保養地づくりに関する情報の提供
国際交流と支援

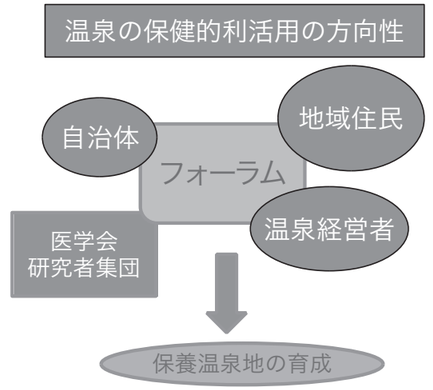


表-1 〈具体的な目標〉

	目標項目
こころの健康	① 自殺者の減少（人口 10万人当たり） ② 気分障害・不安障害に相当する心理的苦痛を感じている者の割合の減少 ③ メンタルヘルスに関する措置を受けられる職場の割合の増加 ④ 小児人口10万人当たりの小児科医・児童精神科医師の割合の増加
次世代の健康	① 健康な生活習慣（栄養・食生活、運動）を有する子どもの割合の増加 ア 朝・昼・夕の三食を必ず食べることに気をつけて食事をしている子どもの割合の増加 イ 運動やスポーツを習慣的にしている子どもの割合の増加 ② 適正体重の子どもの増加 ア 全出生数中の低出生体重児の割合の減少 イ 肥満傾向にある子どもの割合の減少
高齢者の健康	① 介護保険サービス利用者の増加の抑制 ② 認知機能低下ハイリスク高齢者の把握率の向上 ③ ロコモティブシンドローム（運動器症候群）を認知している国民の割合の増加 ④ 低栄養傾向（BMI20以下)の高齢者の割合の増加の抑制 ⑤ 足腰に痛みのある高齢者の割合の減少（千人当たり） ⑥ 高齢者の社会参加の促進（就業又は何らかの地域活動

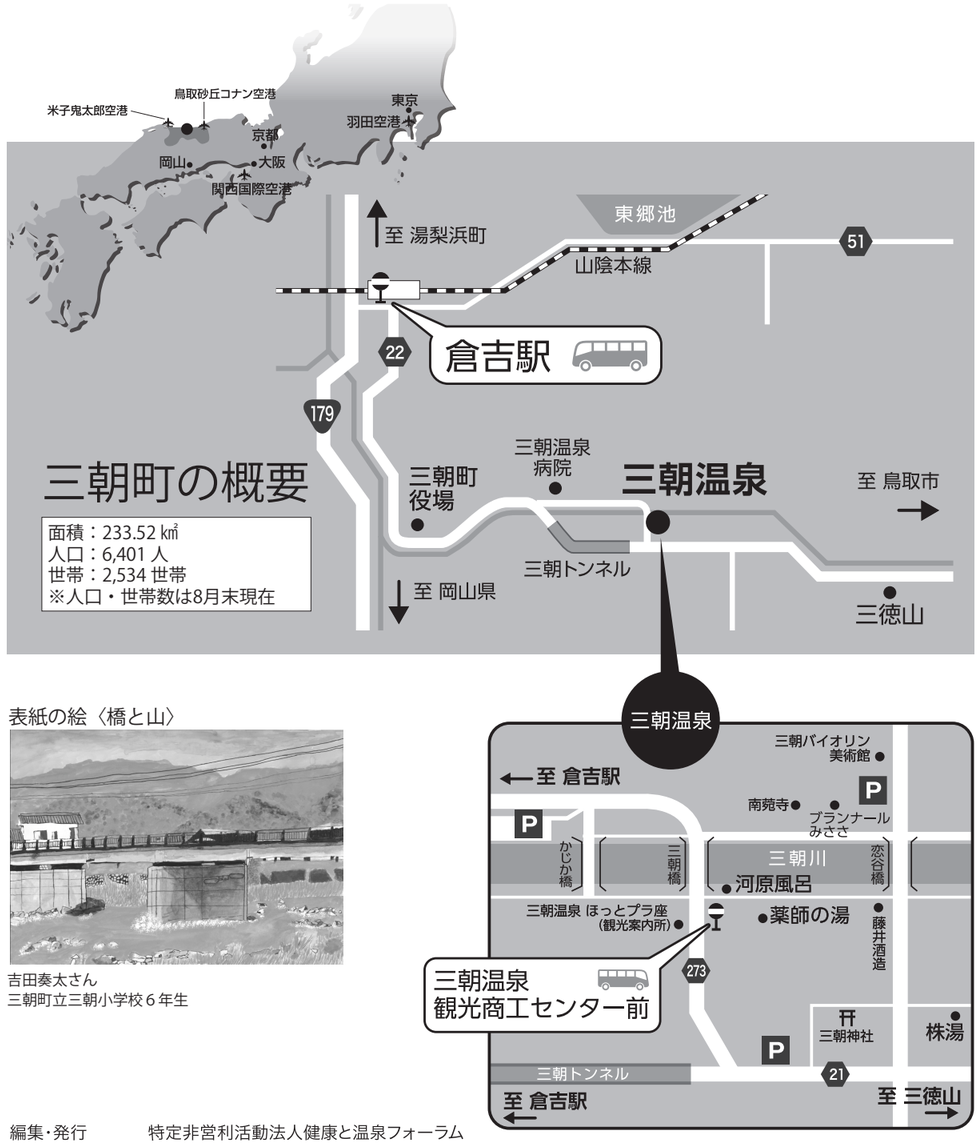
表-2 〈具体的な目標〉

	目標項目
がん	① 75歳未満のがんの年齢調整死亡率の減少（10万人当たり） ② がん検診の受診率の向上
循環器疾患	① 脳血管疾患・虚血性心疾患の年齢調整死亡率の減少（10万人当たり） ② 高血圧の改善（収縮期血圧の平均値の低下） ③ 脂質異常症の減少 ④ メタボリックシンドロームの該当者及び予備群の減少 ⑤ 特定健康診査・特定保健指導の実施率の向上
糖尿病	① 合併症（糖尿病腎症による年間新規透析導入患者数）の減少 ② 治療継続者の割合の増加 ③ 血糖コントロール指標におけるコントロール不良者の割合の減少（HbA1cがJDS値8.0%（NGSP値8.4%）以上の者の割合の減少） ④ 糖尿病有病者の増加の抑制 ⑤ メタボリックシンドロームの該当者及び予備群の減少（再掲） ⑥ 特定健康診査・特定保健指導の実施率の向上（再掲）
COPD（慢性閉塞性肺疾患）	① COPDの認知度の向上

表-3 〈具体的な目標〉

	目標項目
栄養・食生活	① 適正体重を維持している者の増加（肥満、やせの減少） ② 適切な量と質の食事をとる者の増加 ア 主食・主菜・副菜を組み合わせた食事が１日２回以上の日がほぼ毎日の割合 イ 食塩摂取量の減少 ウ 野菜と果物の摂取量の増加 ③ 共食の増加（食事を１人で食べる子どもの割合の減少） ④ 食品中の食塩や脂肪の低減に取り組む食品企業及び飲食店の登録の増加 ⑤ 利用者に応じた食事の計画、調理及び栄養の評価、改善を実施している特定給食施設の割合の増加
身体活動・運動	① 日常生活における歩数の増加 ② 運動習慣者の割合の増加 ③ 住民が運動しやすいまちづくり・環境整備に取り組む自治体数の増加
休養	① 睡眠による休養を十分とれていない者の減少 ② 週労働時間60時間以上の雇用者の割合の減少

温泉地から始まる健康づくり
五感と心を癒す ONSEN の未来



三朝町の概要

面積：233.52 ㎢
人口：6,401 人
世帯：2,534 世帯
※人口・世帯数は8月末現在

表紙の絵〈橋と山〉

吉田奏太さん
三朝町立三朝小学校６年生

編集･発行　特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム
〒151－0066　東京都渋谷区西原１－５０－２
☎・FAX　03-6804-8575
E-mail info@onsen-forum.jp　http//www.onsen-forum.jp
制作　ryoondo-tea　涼音堂茶舗
E-mail info@ryoondo-tea.jp　http//www.ryoondo-tea.jp

©The Forum on Thermalism in Japan printed in Japan